



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サファヴィー朝の対シャム使節とインド洋：『スレイマーンの船』の世界
Author(s)	守川, 知子
Citation	史朋, 46, 1-34
Issue Date	2013-12-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59892
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	journal article
File Information	morikawa2013-12.pdf



論 文

サファヴィー朝の対シャム使節とインド洋 ——『スレイマーンの船』の世界

守 川 知 子

はじめに

1685 年 6 月末、一隻のイギリス船がペルシア湾岸のバンダレ・アッパース港を出帆した。この船には、サファヴィー朝国王シャー・スレイマーン（在位 1666-1694 年）によって派遣された公式の使節団の一行が乗船していた。使節団の向かう先はシャム（暹羅国）である。

17 世紀後半、西アジア世界の陸域では、西のオスマン朝、イラン高原のサファヴィー朝、北インドのムガル朝と三帝国が鼎立していた。これまで、西アジア三帝国の個別の研究はもとより、それぞれの国家間の関係は研究史上十分な注目を集めており、サファヴィー朝を中心に見ても、対オスマン朝やムガル朝、そして何よりも対ヨーロッパ諸国との関係については数多くの研究の蓄積がある¹。一方、西南アジアの海域世界では、イギリスやオランダの東インド会社が覇権を競いながら、インド洋のさまざまな港町を拠点に活動していた。このインド洋世界に関する近年の研究では、ヨーロッパ勢力のみならず、アジアの人びとが域内で移動や交易を盛んに行っていたことが明らかにされている²。だがこれまでの「アジア」については、主にポルトガル人やオランダ人、イギリス人などの「ヨーロッパ」側の目を通して描かれることが多く、「アジア」対「ヨーロッパ」の概念を払拭するには至っていない。

本稿では、西アジアの陸域世界中心史観を離れ、17 世紀末のインド洋海域世界をサファヴィー朝の対シャム使節の視点から見ることににより、「アジアの海」の中での人びとの活動や交流の軌跡を明らかにする。主に使う史料は、サファヴィー朝派遣シャム使節団の書記官であったムハンマド・ラビーウ・イブン・ムハンマド・イブラーヒーム（Muḥammad Rabī' b. Muḥammad Ibrāhīm）がペルシア語で著した『スレイマーンの船（*Safīna-yi Sulaymāni*）』である³。この書物の重要性はたびたび指摘されてきたが、これまでは主に東南アジア史の文脈で用いられることが多く、イラン・西アジア地域とインド洋や東南アジ

¹ サファヴィー朝の対外関係については、*Encyclopædia Iranica* の関連項目を適宜参照いただきたい。

² 長島弘氏の一連の研究や羽田正氏の著書を参照のこと。

³ 同書は、1972 年に John O'Kane 氏によってまず英訳本が出され、その後、1977/78 年にテヘラン大学から 'Abbās Fārūqī 氏によってペルシア語校訂本が出版された。英訳本は注がほとんど付されておらず、訳者の東南アジアに関する知識が不足していることもあり、利用に際しては注意が必要であるが、これまで主に利用されてきたのはこの英訳本である。校訂本は詳細な注が付されているが、索引がない。一方本書の写本は 2 点確認されており、校訂本・英訳本ともに底本としているのが、ロンドンの大英図書館所蔵本（Or. 6942）である。もう 1 点は、イランのマレク図書館にあるとされるが、こちらは筆者未見である。

ア地域との交流史の概説として紹介される以外は、その「文学作品の筆致」ゆえに、未だ十分に活用されたとは言い難い状況にある⁴。だが先にも触れたように、近世のアジア世界は、ヨーロッパ諸勢力の進出に伴い、域内においてもまた活発な交流がなされた時代であり、このような時代にペルシア湾からインド洋を経て、東南アジアを旅したイラン人の記録は、「アジア人の見たアジア」、もしくは「ムスリムの見た多神教・仏教社会」という点において、他に類を見ないきわめて稀有な史料と言えよう。本書は全編にわたり、相当な脚色や誇張、偏見に満ちていることは否めないが、それもまた17世紀という時代や、シーア派ムスリムとしての著者の思想的背景を反映していると考えられる。本稿では改めてこの書物の重要性に鑑みつつ、「アジア人の見たアジア」という観点から当時の世界を再構成することを目的とする。

1. サファヴィー朝の対シャム使節と報告書『スレイマーンの船 (Safīna-yi Sulaymānī)』

1) シャムのイラン人

近世期のシャム王国でイラン人が集団となって活躍していたことは、つとに指摘されてきた。たとえば、よく知られた伝承の1つでは、17世紀の初め（一説では1602年）に、コム出身のシャイフ・アフマド (Shaykh Aḥmad Qummi) という人物が交易のためにアユッタヤーに移住したことが、シャムにおけるイラン人たちの活動の始まりだと考えられている。シャイフ・アフマドは、時のソントム王（在位1610-1628年）の厚遇を得、アユッタヤー宮廷の四大顯官の1つであるマハーットタイ（内務大臣）に就任した。シャイフ・アフマドとその弟ムハンマド・サイード (Muḥammad Sa'īd) は、ベンガル湾貿易を中心とする対外貿易を経済力の基盤としており、ブラクラン（財務）部局の長となる⁵。シャイフ・アフマドの影響力は強く、イラン系の100人ほどの集団が宮廷内で厚遇され、傭兵集団の一部を形成するようになると同時に、シャイフ・アフマドにより、17世紀初頭にはアユッタヤー宮廷内に、イラン系のシーア派ムスリム集団を統括する「シャイフルイスラーム職」が設けられたほどであった⁶。このように、シャイフ・アフマドについては様々な事跡が伝えられているが⁷、史料上の跡づけのないこの人物の実在性に

⁴ 本書を用いた研究には、Marcinkowski 氏の研究が第一に挙げられる。イラン史の観点からは、Aubin 1980 と Rota 2010 があり、Subrahmanyam 1992 もまた交流史の観点から重要である。『スレイマーンの船』の有効性は、Wyatt が同書の書評の中で述べているように、「通常見られるような、タイ＝フランス＝オランダ＝イギリスという枠組みを超えて、ナーラーイ王のより国際的な対外政策を考える」ことができる点にあることは言うまでもないが [Wyatt 1994: 93]、本稿ではシャム史の観点に限定されることなく、当時のインド洋世界そのものの多様性を見ていきたい。

⁵ 徴税業務や産品の王室倉庫への集荷・貯蔵、商船や外国船舶の監督、外国産品の販売など多岐にわたる重職であるブラクランについては、石井氏の研究参照 [石井 1999: 34, 95-115]。その後は首相格のサムハナーヨックの地位にまで昇ったとされるシャイフ・アフマドとその子孫（ブンナーク家）は、代々、ブラクラン担当部局の長官や次官を欽賜名に持った。ブンナーク家の一部はシャムの政界で生き残るために、1750 年ごろに仏教徒に改宗したが、17世紀から19世紀後半にいたるまで、ときの国王を凌ぐほどの実力を備えた名門であった。

⁶ この職は、タイ語で「チュラーラージュモントリ (Chularajmontri)」と呼ばれ、1945 年に至るまで、シャイフ・アフマドの一家系で、シーア派信仰を維持した人々によって保持された [Marcinkowski 2005: 69-82]。

⁷ シャイフ・アフマドに関しては、Wyatt 1994, Chularatana 2008 など、ブンナーク家の家族史や家系研究の観点からの研究がある。彼らによると、『スレイマーンの船』等の諸史料で名前の挙がり、実在性がより確かなアー

ついては、現在でも疑義が持たれている⁸。

一方、対シャム使節団の書記であったムハンマド・ラビーウによると、イラン人集団のシャムへの移住は以下のような経緯となる⁹。

アユッタヤー朝の支配が安定するにつれて、商人たちがアユッタヤーに来航するようになったが、加えてこの地は「ヒンドゥスターンの諸港の大半と近く、海を通じて中国や日本の間に位置して」いるという地の利ゆえに、さらには「象の売買によって莫大な利益が得られ」たために、シャムへの往来が盛んになり、ナレースワン王（在位 1590-1605 年）の時代¹⁰に、「30 人ほどのイランの人びと（*mardum-i Irān*）」が巨利を求めてシャムに住み着き、「各々に家や位階が与えられ、限りない厚遇や敬意を受けることとなり、それぞれに相応の官職が与えられ」た [*Safina*: 92]。そして幼少時からイラン人の家に入出入し、その衣食住の習慣に慣れ親しんでいたナーラーイ王（在位 1656-88 年）は、アユッタヤーに居住していたイラン人集団の援助によって、兄や伯父をクーデターによって追い落とした後、1656 年 9 月に即位した。イラン式の生活様式に慣れ、かつ即位の際にイラン人の援助を受けた王は、即位後すぐに、シャム生まれでギーラーン出身のニスバをもつアブドゥッラッザーク・ギーラーニー（*ʿAbd al-Razzāq Gilānī*）を「大宰相」および自身の顧問（*mushīr*）に登用する。だがアブドゥッラッザークは何らかの理由でほどなく王の不興を買い、1663 年に投獄された。彼の後任には、同じイラン系のアーガー・ムハンマド・アスターバーディー（*Āqā Muḥammad Astarābādī*）がブラクランとして登用された。アーガー・ムハンマドは幼少時からナーラーイ王のそばにいたため、王に長く厚遇された有能な人物であり、宰相（*vazīr*）かつブラクランとしてインド洋方面の交易活動を一手に担ったようである¹¹。

結果、ナーラーイ王は、これらベンガル湾交易に実績のあったイラン系の人びとを重用し、アブドゥッラッザーク、アーガー・ムハンマド、シュエシュタリーと、宰相および顧問役に三代続けてイラン人を

ガー・ムハンマド（後出）は、シャイフ・アフマドの弟の息子とされている [Wyatt 1994: 90-97]。なお、シャイフ・アフマドの墓がアユッタヤーにあり、12 イマーム派をタイに持ち込んだ最初の人物だとさえ説明文には記されている [Marcinkowski 2002: 41-44]。

⁸ また別の説によると、ソントム王の時代に、「南インド」（もしくは「アラブの地」）から 2 人の裕福な兄弟がシャムにやってきて、1 人は「右のブラクラン」、すなわちシャムの西方の交易を担当する大臣になり、もう 1 人はインドに帰った。残った 1 人を王は厚遇し、家やモスクやブドウ園を造る土地を与えた [Andaya 1999: 125]。

⁹ *Safina*: 92-104 に基づく。この点については、『スレイマーンの船』をもとに Aubin 1980 が非常に詳しく論じている。

¹⁰ これまでの研究は O'Kane 氏の英訳に基づいているため、ここでの「王」をナーラーイ王ととっているが、ペルシア語校訂者の Fārūqī 氏が指摘するように、前後の文脈からペグーのビルマ勢力と交戦したナレースワン王と判断する。

¹¹ アーガー・ムハンマドについては、Aubin 1980: 102-112 が非常に詳しく、ほか長島 1994、同 2009 や Hourdequin 2007、Subrahmanyam: 349 等で紹介されている。ところでアーガー・ムハンマドは、シャイフ・アフマドの弟ムハンマド・サイードとアユッタヤーの貴人女性との間に生まれたという説もあるが [Wyatt 1994]、彼が「アスターバード」のニスバを持つ一方、彼の父の「兄」とされるシャイフ・アフマドは「コム」の出身である。シャイフ・アフマドについては『スレイマーンの船』で言及は見られず、実在が確認できない人物である上、上述のように父方の「伯父・甥」で出身地を示すニスバが異なるのは奇異である。シャイフ・アフマドと、アーガー・ムハンマドの父の血縁関係は否定すべきではなかろうか。

登用した。『スレイマーンの船』によると、アーガー・ムハンマドの宰相時代に、200人からなるイラン人の傭兵集団をヒンドゥスターンからシャムの宮廷に導入したとされる。先の3人の「宰相」はほぼ全員が、シャムの最高位階である「チャオプラヤー」の保持者となるなど、宮廷内での彼らの影響力の大きさが窺われよう¹²。

ところでオランダ東インド会社アユッタヤー商館員のファン・フリートは、「多くのさまざまな種類の、さまざまな模様のコロマンデルとスラート [スーラト] からの織物」がシャムでよく売れる品物であり、「それはイスラム教徒、異教徒、シアン人およびその他の国民によってタナサリ (テナッセリム) を経由して多量にもたらされる」と述べているが¹³、先のシャイフ・アフマドも『スレイマーンの船』で述べられるイラン系の人びとも、いずれも交易活動に携わった商人・海商として伝えられていることから、この時期にシャムに渡ってきたイラン系の人びとは、インドと東南アジアを結ぶベンガル湾を中心とした交易活動に従事していたと考えられる。そして「商人王」の異名をもつアユッタヤー宮廷の側も、このようなイラン人を西方交易に活用することで、貿易国家としての地位を確立していたと考えられる¹⁴。いずれにせよアユッタヤー宮廷のベンガル湾交易は、おそらくはインド出身のイラン系の人びとが中心となった「委託貿易」の方法で執り行われており、海商でもある彼らは17世紀を通じて宮廷内で相当な権力を有し、商人として富を蓄えたのみならず、百人隊長や厩舎・象舎の長官職を歴任するなど、軍事面においても傭兵として一大勢力を築いていたのである¹⁵。

しかし1679年のアーガー・ムハンマドの没後、残されたイラン系の者たちの「能力不足」や「内紛」などの理由により、アユッタヤー宮廷でのイラン人の影響力は漸減し、かつての繁栄を謳歌できなくなる。かわってこの時期には、新興勢力であるフランスが宮廷内で伸長する¹⁶。その背景には、当時、ナーラーイ王のもとで急速に頭角を現し、王の新たな「寵臣」となったギリシア系のフォールコン (Constantine Phaulkon) の存在があった¹⁷。本稿で扱うイラン使節がシャムを来訪する1680年代後半は、イラン系集団の力が削がれると同時に、フランスとの関係を重視したフォールコンの時代が到来していた。使節団の来訪以降、アユッタヤー朝下でのイラン人の活動は史料上で確認することが不可能となる。

¹² Wyatt 1994: 90-97.

¹³ ファン・フリート: 196.

¹⁴ Pombejra 1990; 石井 1999: 81-86 など。一方の南シナ海貿易の直接の担当者はすべて中国人であり、アユッタヤー宮廷は国王が投資するものの自前の商船を持たず、「暹羅屋形仕出し唐船」を「唐人船頭」にすべて委託して貿易が行われていた。

¹⁵ *Safina*: 153-154; 長島 1994。イラン人が軍事を担う前は、日本人や中国人が重用されていた。

¹⁶ フランス人がシャムに到来したのはポルトガル (1511 年) やオランダ (1603 年)、イギリス (1612 年) よりもはるかに遅く、1662 年になってからのことである。

¹⁷ フォールコン (Konstantin Gerakis と表記) はイギリス東インド会社船の下級船員として1675年にシャムに至り、言葉を習得してナーラーイ王の通訳から昇進し、顧問となった。カトリック教徒に改宗したことから、オランダ、イギリスを斥けてフランスと接近し、関係を強化。しかしこの政策が仇となり、1688年にナーラーイ王が病床にあったとき、反対勢力の手によって投獄・処刑される。妻はポルトガル系の日本人として知られる。

2) アユッタヤー朝＝サファヴィー朝間の使節の派遣

ナーラーイ王の積極的な対外政策¹⁸を受けて、1669年に、アユッタヤー朝からサファヴィー朝へ最初の使節が派遣された。だが、この使節に関して詳しいことは何ら不明である。

続いて1682年(戌年ヒジュラ暦1093年)には、二度目の使節がアユッタヤー宮廷からサファヴィー宮廷へ派遣される。このときの大使はハーッジー・サリーム・マーザンダラーニー (Hājji Salim Māzandarāni) であり、そのニスバからもカスピ海南岸のマーザンダラーン地方の出身者であることがわかる、イラン系のシーア派ムスリムであった。このハーッジー・サリームは、サファヴィー朝との友好関係構築のために、ナーラーイ王の書簡と数々の贈り物を携えて派遣されたが[Safina: 7-8]、その背景にはアユッタヤー宮廷が当時抱えていた外交問題、すなわち隣国のペグー王国に対抗する同盟関係の模索があったと言われている¹⁹。シャムからの使節は、1683年1月および1684年7月のヨーロッパ人の記録において、サファヴィー朝の宮廷にいたことが確認され、おそらくはハーッジー・サリームはこの間イランに留まり続けたものと思われる。イラン人を大使に据えたこのアユッタヤー朝からの使節団への返礼が、本稿で対象とする『スレイマーンの船』の使節団である。

サファヴィー朝のシャー・スレイマーンが仕立てた返礼使節団の構成要員や、王都イスファハーンを出立した日取りは、サファヴィー朝側の史料からはまったくわかっていない²⁰。使節団は、馬をはじめとする数々の贈り物も携行しており、当初はそれなりに大所帯であり、かつ史料上では明記されないが、シャムから来訪して数年間イランに留まり、シャムへ帰郷するハーッジー・サリームが同行していたと考えられる²¹。慣れない船旅であったことから彼らの旅は過酷を極め、最終的にアユッタヤー宮廷にたどり着いた者はわずか7名のみで、筆頭大使さえもが途中病死するという事態に陥いるのだが、これら生存者たちを含め、『スレイマーンの船』に現れる一行を整理すると、次のようになる。

大使：ゴラーム (廷臣) のムハンマド・フサイン・ベク (Muhammad Ḥusayn Beg)

随行員：コルチ (近衛兵)：数名²²

ゴラーム (廷臣)：数名

¹⁸ 一例を挙げると、1660年、1664-65年にゴールコンダのクトゥブ・シャーヒー朝へ、1680年にはフランスに使節を派遣(マダガスカル方面での難破により失敗)、1684年フランスに使節、翌1685年フランスおよびローマ教皇への返礼使節を派遣している。

¹⁹ 典拠は、同時期にイスファハーン、アユッタヤーを訪れたケンペルの記録である [Marcinkowski 2005: 60-61]。

²⁰ 使節団のバンダレ・アッパース出港は1685年6月27日であり、彼らは同港で6ヶ月間待機しているため、イスファハーン出立は1684年末から1685年初にかけてのことであろう。

²¹ ハーッジー・サリームの同行については、先行研究は具体的に触れておらず、むしろ使節団が到着したテナッセルムで初めて彼の名に言及されるので、そこで彼が一行を出迎えたとみなしている [Marcinkowski 2005: 23]。しかし、マドラスでのイギリスの歓待ぶりや、著者の一行とは別の宿があてがわれた「使者たち (ilchiyān)」というのは、シャム側の使節と捉える方が妥当であろう。後にも言及するように、このサファヴィー朝使節団の旅費や船賃などは、大半をシャム側のハーッジー・サリームが支払うかしくは担保し、そのことが、イラン使節団のシャム滞在中に、この人物が「手ぶらで帰国した」ことや「大金を浪費」し、「イギリスやオランダの会社に多額の借金を作った」ことでナーラーイ王に咎められ、不興を買って投獄されることにつながると推察される [Safina: 22, 102-103]。

²² 随行したコルチの中で名前がわかっている者は Mūsā Beg Pirzāda である。

トプチ (砲兵): 数名

トファングチ (銃兵): 数名

料理人

贈呈官: グラームのイブラーヒーム・ベク (Ibrāhīm Beg)

記録官: 銃兵隊の書記官ムハンマド・ラビーウ

3) 使節団の報告書『スレイマーンの船 (Safīna-yi Sulaymāni)』

『スレイマーンの船』は、ムハンマド・ラビーウ・イブン・ムハンマド・イブラーヒームによって記されたサファヴィー朝の対シャム使節団の記録である。著者はもともと、シャー・スレイマーンの宮廷の「銃兵隊の書記官 (muḥarrir-i sarkār-i tufangchiyān)」であり、使節団の「記録官 (vāqi'a-nevīs)」として随行する。

本書の構成を簡単に紹介しておこう。本書は、神への賛美と使節団派遣の背景に関する簡潔な序文と、4つの「贈り物 (tuhfa)」という章立てで、最後に簡単な覚書が付される。1つ目の「贈り物」(第1章)では、バンダレ・アッパース出港からムスカットを経て、南インドのチナパタン(現在のマドラス/チェンナイ)到着までの往路が描かれ、2つ目の「贈り物」(第2章)では、チナパタンからメルギー、タナースリー(テナッセリム)を経てアユッタヤーとロプー(ロップリー)までの移動の様子、滞在中の出来事および宮廷を辞するまで、さらにシャムの宮廷儀礼や象狩り・トラ狩り等について記される。3つ目の「贈り物」(第3章)では、シャムの地理に始まり、ナーラーイ王の即位の状況やシャムのイラン人コミュニティの小史、シャムの宗教、風俗習慣、特産品などシャムに関する全般を扱い、そして4つ目の「贈り物」(第4章)では、「インド洋」およびその島々(アチェ、アングマン・ニコバル諸島、セイロン島、マニラ、中国、日本、ペグー等)について記した後、アユッタヤーを辞し、マラッカ海峡、南インド西岸のコチ、ムンバイを経由してバンダレ・アッパースに帰港するまでの帰路が説明される。最後の覚書は、「ヒンドゥスターンで生じた最新の出来事」として、1687年9月に陥落したハイダラーバードのクトゥップ・シャーヒー政権(ゴールコンダ王国)に関して述べられている。

同書によると、使節団の出国は1685年6月27日のことであり、帰国は1688年5月25日と、バンダレ・アッパースの出港から帰港まで丸3年近くを要しているが、以下で詳しく見るように、実質的にシャムに滞在していたのは、1686年の1月ごろから翌1687年の1月7日までのおよそ1年間である。このことは、換言すると、使節団は実に2年ほど、本稿で対象とするインド洋海域を広く旅していたことになる。

次章ではこの使節の記録である『スレイマーンの船』から、彼らの旅の様相と、彼らの見たインド洋海域世界に展開する「人びと」を中心に見ていこう。

2. サファヴィー朝対シャム使節の見たインド洋世界

1) 行程

『スレイマーンの船』を扱った研究は多く存在するが、3年間にわたるその行程を具体的に明らかにしたものはない。本章では、使節団のルートをより綿密に再現しながら、『スレイマーンの船』の著者が実際に見たインド洋世界を確認する。

A) 往路

使節団がバンダレ・アッパースでの6ヶ月の準備期間を経てイギリス船で出港したのは、ヒジュラ暦1096年ラジャブ月25日(1685年6月27日)のことである。ペルシア湾はすでに夏季に入っており、気温は相当暑かったものと思われる。初めての船旅にもかかわらず、船員の不注意から岩礁に乗り上げて座礁しかけたり、風が風いで立ち往生したりする中、14日間かけて彼らはペルシア湾を縦断し、ムスカットに到着する。港に3日間停泊した後、船は20日間は穏やかにインド洋を航行するが、その後海上は大荒れとなり、「ノアでさえ遭遇していたら船に乗ろうとは思わないほど」の暴風にさらされ、バンダレ・アッパースを出港後、47日間でチナパタン(マドラス)に到着した²³。

1096年シャッワール月18日(1685年9月16日)に一行はマドラスを発ち、ベンガル湾を東へ進むが、アングマン諸島付近で目的地よりも北方のベグー沖に船は流される。航路を取り戻し、マレー半島北部のメルギーの港に入る際には、座礁寸前のところを地元の船乗りたちの案内を借りて、メルギー港に投錨した。

メルギーから先はシャム側が用意した「サンブーク(舢舨)船」に乗って川を上り、まずテナッセリムの町に入る。テナッセリムから先は「陸路」となり、通常、「商人たちであれば25~26日、使者であれば10~12日」で行くところを、サファヴィー朝の使節団一行は1ヶ月半かけて、「サンブーク船」や象を乗り継いで進んだ。

B) シャムにて

「スーハーン」(バンコクの誤りか)に到着した²⁴一行は、在地の長官やイラン人集団に温かく出迎えられ、より豪華な船に乗り換えて親書や贈呈品とともにアユッタヤーへ向けてチャオプラヤー川を遡った。アユッタヤーまであと1日行程のところ、一行はホラーサーン出身のイラン人ワジール(宰相)に出迎えられ、以後、この人物(Khwāja Ḥasan ‘Alī)が使節団の世話をすることになる。しかしこの段階で、肝心のナーラーイ王が機嫌を損ねて使節団に会おうとせず、離宮のあるロップリーへ狩りに出かけてしまったことを知らされる。王が謁見を拒んだ理由は、後述のように、使節団のテナッセリムでの横柄な振る舞いや、かつ正大使死去後の大使選出にかかる悶着にあったようである。一方、使節団の書記ムハンマド・ラビーウは、謁見が阻止された背景には、フォールコンの暗躍および不誠実なうわさの王への口添えがあったと見ている[Safina: 55]。いずれにせよ、王の不在ゆえに一行はロップリーへ船を進め、そしてロップリーで、使節団用に造られた「イラン様式の邸」に逗留することになる。彼らがロップリーに到着したのは、日数を換算すると、おおよそ1686年の1月ごろと推察される。

ロップリーに到着して20日以上が経ってから、ようやくナーラーイ王から謁見の許可が下り、一行は

²³ ペルシア語原文からは、この日数をどこから数えるのか明記されていないが、「船上にあったこの間に」の表現が直前にあることや[Safina: 19]、この後一行は、ラマダーン中の8月22日にマドラスでイギリス主催の宴会に招待されていることから、バンダレ・アッパース出港時から数えて「47日間」と判断する。よって、ムスカットからマドラスまでは、おおよそ1ヶ月の航海となる。

²⁴ 原文では、スパンブリーのことを示す「スーハーン(Sūhān)」と地名が表記されているが、後述のようにシャム湾のチャオプラヤー河口部のバンコク(より正確にはトンブリー)の間違いと思われる。

宮殿に参上し、国書を渡すことができた。ここに至ってナーラーイ王の不審や疑惑も解けたようで、その後は王宮での食事や、象狩り、シカ狩り、トラ狩りなどさまざまなアトラクションに招待されている。

その後、おそらくは秋ごろ、船の季節が来たので王はアユッタヤーに戻り、それに伴って一行もアユッタヤーに呼ばれ、アユッタヤーの王宮で使節団の各々に布地や貨幣が下賜された。ここで一旦辞去の許可が下ったものと思われるが、ナーラーイ王はその数日後に、使節団を今度は「スーハーン」での船団披露に呼び出し、さらにはロップリーで狩りの準備が整ったという知らせを受け、王はロップリーへ行ってしまう。残された使節たちも、再度ロップリーへ呼び戻され、結果、彼らはロップリーで最後の謁見を賜り、そしてナーラーイ王からシャー・スレイマーン宛の親書を受け取って、1686年12月中旬、サファヴィー朝使節団の一行はロップリーを出発し、帰国の途についた²⁵。彼らのシャム滞在は、1686年の1月ごろからその年の年末までの約1年間であった。

C) 帰路

往路の際、アングマン海からマレー半島を抜ける「陸路」で大使が亡くなるなど苦勞した使節団は、シャム湾からマラッカ海峡を通過する「海路」で帰国することを決心する。だが実際には、ベンガル湾を渡る商人は、風待ちの時間を含め前後6ヶ月を要するマラッカ海峡の航路（「海路」に相当）よりも、むしろテナッセルム＝メルギー経由を選ぶのが普通であったという²⁶。また、ナーラーイ王がアユッタヤーで一行に金品を下賜したとき、シャム側は、テナッセルム経由の帰路用に、使節団のために船などすべて準備していたようである²⁷。しかし使節団が「陸路」を拒んだため彼らを出国させる準備が間に合わず、結果ロップリーに引き返す、という事態を招いた節がある。そしておそらくは、シャム側が用意した船を使用しなかったために、イラン使節団は自ら旅費を工面し、船を賃借するといった交渉をせざるを得なくなった。結果、差配に時間を要し²⁸、相当年季の入った粗末な「スーラト船」を12月31日（サファル月15日）に借り受け、北東季節風の終わり間近に出航することになった。彼らがシャム王国を発ったのは、船を賃借してから1週間後の1098年サファル月22日（1687年1月7日）である。

一行の乗ったスーラト船は、シャム湾を南下するも、数日間、湾内の砂州で立ち往生したり、波が高く、船に浸水したりする。その後、マレー半島中央部のバクタニーで給水し、マラッカ海峡を通過した船は、3ヶ月間、時化や浅瀬に見舞われ、針路を見失って漂うこともあった。こうしてベンガル湾を横

²⁵ 「1098年ムハッラム月の月末まで」ロップリーに滞在したとあること（ムハッラム月末日は1686年12月16日に相当）、およびイエズス会士のフォンタネー神父の日記に、「[クリスマス前の] 待降節の最初の日曜日と、[12月8日の] 聖母の無原罪の宿りの祝日」の「ちょうどその頃、ペルシアの使節一行が帰国の途に着きました」と記されているので、12月中旬ごろと考えてよからう [タシャル: 532-533]。

²⁶ 石井 1999: 79。

²⁷ *Safina*: 72-73 参照。アユッタヤーからテナッセルムを経てメルギー、そしてベンガル湾を航行する交易ルートは、先にも触れたように、シャム宮廷では「右のプラ克蘭」としてイラン系の人びとが担当する部署であった。彼らにとっての主要な交易ルートでもあることから、インド（おそらくは東海岸）までのルートであれば、これらイラン・インド系商人の船に乗せて使節団を帰国させることはたやすかったであろう。

²⁸ オランダ東インド会社のアユッタヤー商館と交渉するも、折り合わなかったようである。島田竜登氏（東京大学）のご教示による。

断し、インド南端のコチに到着したのであった。一行の船は、風待ちのため、コチでの8ヶ月間の滞在を余儀なくされる。これは、使節団の寄港地としては最も長い滞在となっている。

8ヶ月後、季節が変わると、船はコチからスーラトへ向けて出帆するが、イギリスとムガル朝の関係が悪化し、イギリス側がスーラト港を封鎖していたことから、一行の船はスーラト沖で待機させられ、入港することができなかった。そのため彼らは、スーラトからイギリス船で運ばれてムンバイに向かう。

3ヶ月半、再度風待ちのためにムンバイに滞在した後、1099年ジュマードーII月5日(1688年4月7日)にムンバイを発ち、1099年ラジャブ月24日(1688年5月25日)、彼らは丸3年近くのミッションを終え、ようやくバンダレ・アッパースに帰り着いた。

こうして使節団は帰路もまた、往路と変わらないほどに難儀し、そして実際には風待ちのためにさらに多くの時間をインド洋海域で費やしたのである。

2) 使節団の滞在地・停泊地

別表は、使節団の3年弱の旅行中に彼らが滞在したか、実際に通り過ぎた町について挙げたものである。ただし「滞在」といっても、港で停泊し、上陸していないケースもある。そのため、『スレイマーンの船』の記述には場所によって情報密度の濃淡がある。だが逆に、この濃淡こそが伝聞と実見との差であるとも考えられるので、記述を敢えて加工することなく表に収めた。一方、日本やマニラなど、立ち寄ったことが確認できない地については、特別な場合を除き割愛する。

使節団の滞在地・停泊地のうち、主に地名の記載のあるものを順に挙げると、①「アッパースの港」(バンダレ・アッパース)、②ムスカット、③チナパタン(マドラス)、④メルギー、⑤タナースリー(テナッセリム)、⑥ジャラング(?), ⑦ペタチャブリー(ペップリー/ベッチャブリー)、⑧スーハーン(?), ⑨「船の町」(アユッタヤー)、⑩ロプー(ロップリー)、⑪バターニー(パッタニー)、⑫マラーカ(マラッカ)、⑬コチ、⑭スーラト、⑮ムンバイ、そして「アッパースの港」となる。

先に見たように、行きはイギリス船、帰りはスーラト船に乗船したことが、広大なインド洋海域で一行を様々な寄港地へと誘ったのは疑い得ない。彼らの立ち寄ったインド洋の寄港地のそれぞれが、当時のこの世界の多様性をまざまざと反映している。以下、表に基づき見ていこう。

3) 『スレイマーンの船』にみる各地の描写

① アッパースの港 (Bandar-i 'Abbāsi) / バンダレ・アッパース

まず①のバンダレ・アッパースについては、6ヶ月間も準備のために留まらざるを得なかったにもかかわらず、同書ではまったく描写がなされていない。そのため、著者がこの新設のサファヴィー朝の玄関口をどのように見たのかについては知るすべがない。

出港後の様子については、初めての船旅の過酷さを記したいのだろうとはいえ、凝った文体の描写は過剰である。ムスカットまでわずか2週間にもかかわらず、座礁の危機に見舞われた以外に、暑さのために船の水がなくなり、配給された少量の水には虫が湧いているという始末であった。任務遂行の出だしから死を覚悟する記述に満ちており、初めての航海への著者の不安が如実に伝わってくる。

② ムスカット (Musqat)

彼らが最初に停泊したのは、ペルシア湾の対岸にあるムスカットである。ここでは給水のために港に停泊し、上陸はしていない。

著者のムハンマド・ラビーウは、何よりもまず、この地は「ナーシィビーとハワーリジュのアラブたち (A'rāb-i Nāṣībī va Khawārij)」[*Safina*: 15] の港だと述べる。続いて、「ポルトガルのフランク人 (Farangiya-yi Purtugāliya)」がこれら「ハワーリジュ」によって、如何にしてこの地から排斥されたかについて述べ²⁹、再びハワーリジュに話を戻し、第4代正統カリフかつ初代シーア派イマームのアリー (661年没) と敵対したハワーリジュの末裔がムスカットの住民である、という説明がなされる。このハワーリジュ派は道を踏み外した者たちであるにもかかわらず、商人や旅行者たちを苦しめたりしないとも記している [Safina: 16]。

なお、ムスカットでの出来事として、マーザングラーン出身のメッカ巡礼者がムスカットから乗り込んできたが、強風に煽られて船から落ちて死んだ事件が載せられている [Safina: 18]。

③ チナパタン (Chināpatan) / マドラス (現チェンナイ)

使節団一行の次の停泊地は、南インド東海岸のマドラスである。彼らはこの地を「チナパタン (Chināpatan)」と表記する³⁰。イギリス船で航行していた彼らはここで、イギリスのセント・ジョージ城砦に3～4週間滞在する。書記のムハンマド・ラビーウは、チナパタンについて、「カルナータカ (Karnātak) の王の港の1つであり、ハイダラーバード周縁部に近く、イギリスが12,000フンの額で借り受けている」港だと述べており、借り受けたイギリス人たちがここに城砦を造り、町を建設したと伝える³¹。この町に対する彼の記述は、同書の中で最も好意的である。

ここは、非常に緑豊かで心地よい港である。約4分の1フェルサング (1.5 km) ごとに敷かれた道路によって区切られており、中には庭園や邸宅がある。その地の住民はあらゆる部族からなる。とりわけ「テルグ (Talanga)」のヒンドゥーたち (Hindiyan) と、ポルトガルのフランク人 (Farangān-i Purtughālī) の一団がいる。

かつて、この港の近くに、「マイラープール (Maylāpūr)」³² と呼ばれる別の港があり、上述のフランク人たちが占有していた。だが彼らが起こした不埒な行いのために、ハイダラーバードの支配者 (vālī) は軍を率い、彼らの城砦を打ち壊してしまった。残った者たちはここにやって来て住み着いた次第である。イギリスの長官 (ḥakim-i Inglīs) は、彼らから財や金銭を取り上げはせず、圧制や

²⁹ 1650年のこと。地元勢力のアラブ系のヤアーリバ朝によって奪回された。

³⁰ 1580年にゴールコンダと戦った英雄ダーマルガが、父チェンナッパの名にちなんでこの地域につけた「チェンナッパッタナム (Chennapattanam)」の音写であろう。

³¹ マドラスは、1522年以来、ポルトガルがイエスの12使徒のひとりである聖トーマスにちなみ「サン・トメ」と名づけた城砦があり、そこを拠点にポルトガルが支配していた。1639年にはイギリス東インド会社がポルトガルを追い払い、その北方の土地を現地の地方豪族から借り受けることに成功し、翌年にはセント・ジョージ城砦建設を開始した。17世紀のマドラスの要塞化については、和田2012: 127-130が簡潔にまとめている。

³² マドラスの南方にあったポルトガルの城砦サン・トメのこと。

抑圧も行わず、港が発展することに喜びを見出しているの、日に日に周辺各地から「人々が」ここを目指してやって来ては、住み着いている。[*Safina*: 22-24]

マドラス港に到着後、待たされることなく上陸を許可され、イギリス東インド会社のセント・ジョージ城砦に礼砲とともに招かれて案内を受け、さらには城砦外での宿舎や食事の提供など、滞在中のすべての世話をイギリス側にしてもらったことで、著者の記述は好意的なものになったのだろう。

なおここで初めて、サファヴィー朝の使節団よりも若干早くシャムに到着していたフランス使節団に、サファヴィー朝使節団の情報がもたらされている。ショワジは、「ペルシアの大使が元首（ソフィ）からのシャム王への豪華な贈物を携え、大勢の随員を従えてマドラスパタン（マドラス）に到着した。それにしても、なかなか愉快なことに、彼「フランス人宣教師デュ・カルボン」の話ではこの大使はシャム王に回教徒に改宗するよう勧めに来たのだそうだ。もしその通りなら、われわれは決闘で決着をつけることになるだろう、と愚考する」と10月23日付の日記の中で記している[ショワジ: 200]。

④ メルギー (Mergī) (現ベイツ)

1096年シャッワール月18日(1685年9月16日)にマドラスを出航した使節団一行の船は、ベンガル湾、アンダマン海を渡り、当時はシャムの領内であったマレー半島北部のメルギーに到着する³³。シャム側からの歓待、すなわち楽器の演奏でもって「国書」が恭しく迎えられ、一行は初めてシャムの地に入った。シャムの重要な港町であるメルギーで、彼らは「イラン出身者」によって接遇される。ムハンマド・ラビーウは、「イランの者 (mardum-i Īrān) による『ズルフィカール (アリーの所持した二又の剣)』という名の建物があった。その不運な男はその地方へ行ったところ、かの地の帝王が彼をその森林の長官にして監督者とした」[*Safina*: 37]と、海を渡って一旗あげたイラン人について述べている。彼の記述では「シーア派」とは記されていないが、この人物は、イマーム・アリーのシンボルでもある「ズルフィカール」という名を建物につけたり、息子に「ムハンマド・サーディク」という名をつけたりしていることから、イラン系の中でもシーア派であったと考えてよからう。この長官こそは、ジョージ・ホワイトの1678年の報告で、「テナッセリムとその…メルギ町のラージャたちすなわち長官たちはペルシア人である」と言われている人物の1人であろう³⁴。

さてこのイラン人長官は、かの地の人間では不可能なほどに趣向を凝らしてこの建物や風呂を建設し、使節のために絨毯を敷き、「イラン式」の家屋で歓待した。そしてサファヴィー朝使節団の接待役には彼の息子のムハンマド・サーディクがあたり、朝と晩に、当地の産品のコメを中心に供したようである[*Safina*: 37-38]。

⑤ タナースリー (Tanāsūrī) / テナッセリム

メルギーからテナッセリムまでは「サンブーク船」に乗り込み、使節団は半島の内陸部の川を遡上し

³³ アユッタヤー朝がメルギーを支配下においたのは、後出のテナッセリムとともに1460年代のこととされる[Chutintaranond 1999: 110]。

³⁴ 長島 1994: 216。

た。途中、河岸に設けられた使節団のための簡易宿泊所で1回泊まった上で、彼らはテナッセリムに到着した。テナッセリムの描写には、

ここは、非常に緑あふれた城砦都市である。そこにはおよそ5000～6000軒の家があり、シャムの人々や、シャーフィイー派やハナフィイー派のヒンドゥスターン出身のムスリムたちがおり、さらにはヒンドゥ（Hindū）やフランク（Farangī）が暮らしている。[*Safina*: 40]

とある。当時のテナッセリムは、アユッタヤー朝にとってベンガル湾に抜けるための重要な交易路として認識されており³⁵、シャム系、インド系、ヨーロッパ系³⁶など、さまざまな人びとが暮らすのみならず、マレー半島北部の森林の中にまで、スンナ派のムスリムたちが進出していたことが窺われよう。一方、この地まで同行して使節団の接遇にあたったのは、先のメルギー長官のイラン人の息子ムハンマド・サーディクであり、イラン系の人びとのまとまったコミュニティは史料からは確認されない。また先のメルギーで、シャム側大使のハーッジー・サリームが「市場や買い物をするとところはどこにもない」[*Safina*: 37]と言っているが、これはおそらく、イラン使節団向けにイラン式の食事を供する場所がない、ということであろう。テナッセリムやメルギーといった交易都市は、シャム＝ベンガル湾を結ぶ重要な交易路であるために、先のホワイトの報告書にもあるように、商人であるムスリムやヨーロッパ人が比較的多数居住していたと思われる反面、文化的には完全にシャムの風土のもとにあったということであろう。

ショワジがここで、サファヴィー朝の使節団について、同年11月14日および11月25日付で興味深い記述を残している〔()内は翻訳者の原注〕。

[11月14日] テナッセリムの情報が入った。ペルシアの大使が大がかりな一行を従えて彼の地に着いた。どんな顔をしているのか見たいから、彼がわれわれの出発前にここに着くといいと思う。書物によればペルシア人はフランス人のような顔をしているという。われわれは彼らと仲よくなって、航海中に毎朝飲むように、シーラーズ産の葡萄酒を貰えるかもしれない。ペルシア大使のほうは来ようとすれば充分間に合うが、しかし多分コンスタンス〔フォールコンのこと〕どのは、双方の大使の間にいざこざを起こしたくないと思っているだろう。ペルシア王（ソフィ）に対してルイ大王にしたと同様の敬意を表する前に、われわれを出発させるだろう。[ショワジ: 224]

³⁵ 1460年代にアユッタヤー朝が支配下に置いたテナッセリムについては、Chutintaranond 1999が詳しい。16世紀前半までのテナッセリム（メルギー含む）は、周辺諸国同様自治を享受し、自ら「王」を名乗りつつも、アユッタヤー朝の宗主権を認め、かつ近隣諸国とも関係を築いていた。なお、ヴァスコ・ダ・ガマ（1524年没）らによると、当時のテナッセリムには、「Moors〔ムスリム〕とGentiles〔非キリスト教徒〕のコロニー」があったと伝えられる[Chutintaranond 1999: 108-114]。貿易港として重要な両市は、16世紀を通じてビルマの侵攻を受け、同世紀末の一時期ビルマの支配下に入るも、ほどなくアユッタヤー朝が取り戻し、1765年まで継続してアユッタヤー朝の支配下にあった。

³⁶ 17世紀後半のテナッセリムには、2つの教会があったとされる[Smithies 1995: 66]。

[11月25日] コンスタンスどのがわれわれに語ったところによると、王はペルシアの大使に対して、非常に怒っている。ペルシアの大使はテナッセリムで、傍若無人に振る舞っている。彼はイギリス船で来たのに船長に一文も払わなかった。テナッセリムの長官が大使閣下に代って船長に六百エキュ与えた。彼の上陸に際しては丁重に歓迎したのに、彼は何かから何まで気に食わない。彼の給仕長は、出される料理を全部突っ返す。ペルシアから戻ったシャムの大使が、ある日彼に、イスファハンでもこれほどの御馳走は出なかった、と言ったところ、彼は怒って、部下に命じて、必要なものを全部買うために市場へ行かせた。長官はすぐに、大使の要求する物は全て無料で渡せと命令した。命令は実行された。しかし翌日になると、市場の女たちは長官がちゃんと支払ってくれないのではないかと心配して、売場を放棄してしまった。ペルシア人たちは長官のところに食物を乞いに戻らざるを得なくなった。この大使は、自分の家の前を女が通ったら銃撃させる、また、自分の行く先で酒を売っていることが分かったら、もっとひどいことをしてやる、と宣言した。このような傲慢不遜なやり方を好まないシャム王は、この大使に接見しないで送り返そうと思っているし、もしこれを続けるなら、厳しく対処するだろう。[ショワジ: 241-242]

ショワジの記述はかなり辛辣ではあるが、シャム王国内で、同時期に来朝したフランスとイランからの大使が鉢合わせするかもしれない緊張感が垣間見られる。また、ショワジによると、イランからの使節団は上陸後テナッセリムでわがもの顔に振る舞っていたことになるが、だが、現実にはサファヴィー朝の使節団にとって、このとき思いがけない出来事が起こっていた。それは筆頭大使ムハンマド・フサイン・ベクの客死である。ムハンマド・ラビーウの言によると、大使は長期間の慣れない船旅のせいで、早くもマドラスで水腫の兆候が現れ、テナッセリムに到着するころには衰弱しきっていた。シャム側からは、シャム人と中国人の医者がテナッセリムに急遽派遣されたものの手遅れで、サファヴィー朝の正大使は1097年ムハッラム月12日(1685年12月9日)に任務を遂行することなく亡くなった。大使の他にも過酷な船旅の道中で亡くなる者が多く、ここに来てサファヴィー朝使節団は、「コルチが2人、ゴラームが2人、銃兵と砲兵が1人ずつ、私(書記のムハンマド・ラビーウ)」[*Safina*: 41]のわずか7名の生存者を数えるのみとなったのである。

ショワジの記述にあるように、乗船したイギリス船に運賃を払わないのは論外であるが、大使が瀕死の状態にあった時期だとすると、使節団の一見横柄な振舞いは、異国の地で故郷の料理を求めて奔走したとも考えることができるのではなかろうか。

⑥ ジャラング (Jalang)³⁷

大使亡き後、わずか7名の使節団として数々の贈り物とともに「サンブーク船」で川を「20日間」遡

³⁷ この地名については不明。1700年にアムステルダムで出版された、ルイ14世の使節であるフランス人 De la Loubère の見聞録に付された地図に、「Ialingue」という表記の村が、テナッセリムの北東の川岸に見える。彼に先立ち、1662~63年にメルギー=アユッタヤー間を「陸路」旅した De Bourges は、メルギー=テナッセリム=Ialianga=Menam=Pram(プランプリー)=Piperi(ペップリー)=アユッタヤーというルートを記しており、ここにも「ジャラング」に相当すると思われる「Ialianga」という地名が確認できる [Smithies 1995: 66]。

行した一行は、途中ジャラングという村で一泊する。ここでは、使節団やサファヴィー国王からの親書用に立派な象が用意されているが、それ以上の記述はない。

⑦ ペタチャブリー (Patach-būrī)³⁸/ペップリー

彼らはさらに「15日間」進み、ペップリーの町に到着した。ペップリーについては、使節団が到着すると、「その地で長官 (hākīm) をしており、権限を有していた (ṣāhib-ikhtiyār) サイド・マーザンダラーニー (Sayyid Māzandarānī) が出迎えに急ぎやってきて、伺候の儀に必要な諸事を執り行った」[*Safina*: 43]と記されている。ペップリーはシャム湾北西の付け根部分にあたるが、この地にもまた、イランのカスピ海南東岸出身のサイドが任じられ、重用されていたことが明らかとなる。

⑧ 「スーハーン (Sūhān)」/スパンブリー (?)

翌日は「スーハーン」に向かい、到着後、「チェレビー (Chelebi) という名のルーム (Rūm) 出身の男」によって一行は出迎えられる。『スレイマーンの船』の記述によると、この男は「この地へやってきて、シーア派 [に改宗する] という榮譽に浴し」たのであった [Safina: 43]。彼は、「ラージャ (rāja)」であり、シャムの大臣や高官らのみに許された上等な船に乗っていると記されていることから、イラン系の人びと同様、シャムに移住し、王国内で厚遇された人物である。

なお、「スーハーン」という表記は、スパンブリーを音写したものと思われるが、スパンブリーはタイ中部の町で、アユッタヤーの西方に位置している。一方、フランス人宣教師らによると、当時のバンコクの長官が「回教徒のトルコ人」だと伝えられ、「チェレビー」が統治する地域は今日のバンコク (トンブリー) だと同定されている。アユッタヤーの前衛都市として建設されたトンブリーは、ナーラーイ王のときに砲台が置かれ、「国主としてトルコ人が任命され」、さらに「1685年にはフランス人フォルバン Comte de Forbin がトンブリー国主となり、砲術の訓練に当たった」と説明される³⁹。これらの見解が正しければ、『スレイマーンの船』の「スーハーン」は著者の記憶違いで、「バンコク」より正確にはバンコクを包含する「トンブリー」とみなすのが妥当であろう⁴⁰。

使節団の一行は、この地でアユッタヤー宮廷から出迎えにやってきたイラン人集団 (Īrāniyān) と会い、以後、このイラン人たちに滞在中の世話をしてもらうこととなる。

³⁸ O'Kane 氏の英訳では、「Paj Puri」と表記される [O'Kane (tr.): 49-50]。

³⁹ 石井 1999: 39。

⁴⁰ 『スレイマーンの船』では、上記の到着時の他、ロップリーからアユッタヤーに戻ったときの記述として、アユッタヤーから船で向かった「スーハーン」で船団披露があったことが述べられる [Safina: 73]。ところでペルシア語の sūhān には「やすり」の意味があるので、スパンブリーの音写ではなく、トンブリー (バンコク) の城砦などを指す可能性も否定はできない。さらには 14~15 世紀には、メルギー、テナッセリムからモーグウン峠を越えてシャム湾に抜け、ペップリー、ラーブリー、そしておそらく「スパンブリー」を経てアユッタヤーに入るルートが利用されている。このように、アユッタヤー、ロップリーと並ぶ、ベンガル湾交易圏・南シナ海交易圏の結節点としてのスパンブリーの地理的重要性については、石井 1999: 48-66 が詳しいが、17 世紀に入ってもスパンブリーが同様の重要性を維持していたとすれば、『スレイマーンの船』のスーハーン (スパンブリー) の記述は正しいことになろう。この点は今後の研究に俟ちたい。

⑨ 「船の町 (Shahr-i Nāv)」／アユッタヤー

ペルシア語では、この町は「船の町」と呼ばれた⁴¹。チャオブラヤー川のデルタ地帯に位置し、1351年にアユッタヤー朝の都となった「水運の町」である。既述のように、サファヴィー朝使節団の一行は川を上ってアユッタヤーまで向かい、町まで1日行程のところに滞在するが、ここでシャム王ナーラーイは、イランからの使節団に接見しようとせず、さらに北方のロップリーに狩りをしに移ってしまったことが明らかとなる。ほどなく使節団はロップリーと呼ばれ、アユッタヤー市内には入らない。以後、滞在期間のほぼすべてをロップリーで過ごすため、『スレイマーンの船』ではアユッタヤーそのものに関する記述はきわめて少ない。ロップリーから一旦アユッタヤーに戻った時に、絨毯が敷かれ風呂のある館があてがわれた [Safīna: 72]、と記されるのみである。

⑩ ロブー (Lubū)／ロップリー

アユッタヤーであれ、ロップリーであれ、どちらの「都」にも、シャム宮廷で重用されたイラン人集団が王宮のそばに居住し、邸内に絨毯や風呂が備え付けられた「イラン式の建物」があった。ロップリーでもまた、サファヴィー朝使節団にはこのような邸が供された。ちなみに、1687年末にロップリーを訪れたタシャールら、イエズス会士の一行はこの「ペルシア風の邸」に滞在することになったが、神父たちは「家具が余りに豪華で贅美を尽くしていることに不満を言っていた」[タシャール: 511]とあることから、絨毯が敷き詰められ、風呂も設置されたこのレンガ造りの建物は、アユッタヤー朝領内でも随一の立派な建物だったのであろう。

ロップリーにはモスクもあり、そこではイマーム・フサイン (680年没) の殉教を悼むアーシューラーの哀悼行事や、礼拝時には「偶像崇拜者や不信心者たちへの呪詛 (la'n va ṭa'n)」が行われるなど、シーア派信仰が体现されていたようである⁴²。

続いて、帰路について見ていこう。

⑪ パターニー (Paṭānī)／パッタニー⁴³

モンスーンの季節の終わり間近にシャム湾を出帆したため、使節団が借り受けたスーラト船は、時化

⁴¹ ペルシア語起源の「船の町」という名称は、16世紀初頭のイタリア人探検家ルドヴィコ・ヴァルテマが「サルナウ (Sarnau)」と言及しているものと同様である。この語の意味および広まりについては、Marcinkowski 2002: 25-27が簡潔にまとめている。

⁴² サファヴィー朝期にシーア派普及政策の一環として、広く国内で行われた「呪詛」については、守川 1997: 30-40を参照されたい。サファヴィー朝領内での「呪詛」の対象は、アブー・バクル、ウマル、ウスマーンら正統カリフ3名と、ムハンマドの晩年の妻アーイシャ、ウマイヤ家のムアーウィヤなどであり、偶像崇拜者たちではない。「モグールのやり方で」と記されるここでの「シーア派」がサファヴィー朝由来の12イマーム派なのか、インドの7イマーム派なのか確認する術はないものの、ここにも地域に応じて変容する、信仰の「地域性」が見て取れる。この時期のアユッタヤーでのシーア派ムスリムとアーシューラーの哀悼儀礼については、Aubin 1980: 98-99が詳しい。

⁴³ イスラームを信奉するパッタニー王国は、16世紀末から17世紀中葉まで4人の女王による支配が続き最盛期を迎えるが、4人目の女王の後は勢力が衰え、サファヴィー朝使節団の訪れた1680年代後半は、すでにアユッタ

や風待ち、海賊の襲撃などさまざまな不運に見舞われる。出航して数日後には船体に穴があいて浸水する事態となり、一方で追い風が吹かず、飲み水にも事欠くほどであった。このような状況で給水のために立ち寄ったのがパッタニーである。著者のパッタニーの描写は、これ以降のインド洋沿岸地域に比べると、短いながらも好意的である。

実に心地よく快適で、豊かで繁栄したところである。その地方の大半の果物がこの地にある。樟脳、錫、沈香、白檀、蘇木が手に入る。砂金は、いわゆる鉱山があるわけではなく、その地の町や郊外で砂利のように毎年いくらか入手できる。

と述べた上で、「その地の支配者 (vāli) は女であり、民 (ri'āya) はムスリムで、シャーフィイー派である」と記す。これに続けて、かつてシャム王やアーガー・ムハンマドらがこの国に奇襲をかけて制圧し、その後の和議により、この地から毎年「黄金の花」をアユッタヤー宮廷に貢納することが決められた結果、「現在は、謀反のヴェールの中に頭を隠している状況である」とされている [Safina: 216-217]。

⑫ マラーカ (Malāqa) / マラッカ

給水の後、船は3ヶ月の間、「大時化や航路の見失いや船の砂州への乗り上げやそこからの脱出」 [Safina: 217] を経てようやくマラッカに入り、その後インド洋を横切り、「多大な困難や憂き目」の後、南インドのマラバル海岸の港市コチに到着した。このように、マラッカに関する記述は、左右に風が強く吹くこと、浅瀬であること以外には何ら記されておらず、使節団の船はマラッカ港出帆後、いずれの港にも立ち寄ることなく、一路コチへ向かったものと思われる。

なお、「インド洋の島々」については、マニラや日本、アチェ、ニコバル諸島、セイロン島などについても記述があるが、これらの島々は使節団の乗った船が立ち寄った場所ではなく、あくまでも伝聞情報等に基づき、著者ムハンマド・ラビーウが記したものである。

⑬ コチ (Kūchi) / コーチン

コチで彼らは、風待ちのため8ヶ月間⁴⁴も滞在しなければならなかった。当時のコチはオランダ東インド会社がポルトガル勢力を駆逐して支配していた港である。使節団が港町のどの区域に居住していたのかはまったくわからないが、この町については、著者自身の体験談も含め、比較的多くの出来事が記されている。

たとえばこの地のラージャが預言者ムハンマドの時代に「月が2つに割れる」という奇跡を聞き、ムハンマドのもとに出向き、イスラームに改宗したという逸話がまず紹介されるが、その後、人びとは再

ヤー朝の支配下に入り、表面上はアユッタヤー朝に帰順していた。「金銀の花」を朝貢することはファン・フリートの書にも見える [ファン・フリート: 133-134]

⁴⁴ ファールーキー校訂本、O'Kaneの英訳も含め、先行研究では「6ヶ月」となっているが、その少し前の箇所では「8ヶ月間も滞在せざるを得なかった」と著者が述べていること、およびロンドン写本は当該箇所が「8ヶ月」となっていることから「8ヶ月」が正しい [Safina: 217, 223; O'Kane: 225; Marcinkowski 2005: 30]。

び父祖伝来の信仰に戻り、現在では「彼らのうちの誰一人としてムスリムたちに決して会おうとしないほどに、彼らはムスリムを避け、慎重になっている」と、著者は伝える。これに続けて、自らの体験談として次のような話を載せている。

その部族の王国は非常に青々として心地よいので、ある日、散歩がてらにラージャの屋敷の門に通りかかったところ、そこには縦横 100 腕尺ほどの池があり、水を満面にたたえていた。たまたま小生（ムハンマド・ラビーウ）の配下の 1 人がそこで手を洗おうとする。そうするかしないかのうちに、番兵たちは「そのことに」気づき、大声や叫び声をあげた。喧嘩や騒ぎを起こそうと、大勢の者たちが集まってきた。状況が明らかになった後、その地の者たちの一団がやって来て、「これは、ラージャやヒンドゥが毎日 2 回やって来て、その中で体を洗う池である。彼らはムスリムと遭遇することを不浄 (najis) と信じている」と説明した。

詫びて、何度も願い入れた後、そのゴラームの咎は赦され、「池を空にして、よく清掃せよ。そして新しい水を入れよ」というラージャの命が下った。聞いたところでは、もしその地方のムスリムがこのようなことをしたならば、その者は捕らえられ、たくさん痛めつけられるとのことである。

[Safina: 220-221]

ムハンマドの時代に、「月が割れる」という奇跡を目の当たりにしてイスラームに改宗したにもかかわらず、しばらくしてイスラームを捨て、偶像崇拜者に戻ってしまったコチの人びとは、サファヴィー朝の使節団が寄港した 17 世紀後半には、いかなる場合であれムスリムを忌避するようになっていた。少なくとも使節団は実際、そのような事件に遭遇したのである。ところが、時代を遡って 15 世紀初頭に鄭和に随行した明の馬歡の記録によると、仏教徒の国王を擁した柯枝国（コーチン）では人びとは五階級に分かれ、国王階級に次ぐ第二等に「イスラム教徒（回回人）」が位置している [小川編: 111-112]。すなわち、鄭和から 250 年以上を経たこの時代、ラージャがヒンドゥであったコチにおいてムスリム社会は衰退したか、ヒンドゥ教徒が増加し肩身の狭い状態にあったと考えられる。少なくともムハンマド・ラビーウは、この地でのムスリムやイラン人の情報にはまったく言及していない。

ところでムハンマド・ラビーウは、8 ヶ月間ものコチ滞在中に、その近郊の情報も仕入れており、マラバルやディーヴといった地には、シャーフィイー派のムスリムがいることを伝えている。ただし、「シャーフィイー派」を名乗る彼らの信仰心は、ムスリムに対してさえも行う海賊行為により、著者の目には多少なりとも「邪道」と映っていたようである。

その王国から 3 日行ったところに、[別の] 部族がおり、生まれながらのマリーバル [マラバル] で、それぞれにラージャがいる。彼らはイスラーム教徒だと主張し、シャーフィイー派で、かの地の大半の住人は「クルアーン」を暗唱する。

彼らは船を見つけるとやってきて、戦闘を始め、命ある限り、船を奪おうと努める。彼らはこのような行為の正当性を表明する文書として、シャーフィイーの従者 (khuddām) たちが、「海で漁撈し、また獲物を食べることはあなたがたに許されている」[Q5:96] という [クルアーンの] 章句の解釈において、「海での漁撈」を「船を奪うこと」だとし、そのようなやり方で、「人々の船を奪う

ことができ、この点については人[を強奪すること]も合法である」という解釈と法判断 (fatwā) を行っているのである。彼らの論拠は、「もし不信心者の財産であれば、ムスリムにとっては合法である」というもので、もしムスリムのものであれば、「信者たちは兄弟である」[Q49:10]に基づき、「当然のことながら、兄弟のものは互いのものであり、[互いの] 分け前である」ということになる。そして船に乗っている者は、ムスリム以外はどのような人々であれ殺し、[相手が]ムスリムであった場合でさえも、合法性を主張した後、彼らの身ぐるみを剥ぎ、自力でどこかにたどり着けるだけの糧食を与えて解放するのである。[*Safīna*: 221-222]

⑭ スーラト (Sūrat)

季節風を待ち、ムスリムに敵対的なコチに8ヶ月滞在した後、使節団の一行はすぐにバンダレ・アッバースに帰港できると考えていたようである。しかしながら、シャムで借り受けたスーラト船の船長がそのようなことを考えるはずもなく、船は西北インドの港町スーラトに向かった。途中、海賊の襲撃を受けつつも、スーラト港に到着した。しかし、当時、イギリスとムガル朝の間に交易を巡る対立⁴⁵があったために、イギリスがスーラト港を封鎖していた。このため使節団一行はイギリス船でムンバイに向かうことを余儀なくされる。港には入っていないため、スーラトに関する記述はない。

⑮ ムンバイ (Mumbā'ī)

ムンバイは、往路で使節団に非常に好意的であったイギリス東インド会社の支配下⁴⁶にある港町だが、旅の最終局面であり、かつ進路が逆戻りしているために、著者のムンバイへの印象は惨憺たるものとなっている。

われわれには船がなかったので、その半島(ムンバイ)で3ヶ月間滞在した。[そこは]水も空気もきわめて悪く、汚く、物価が高く、その地の住民は自分の子どもを飢饉の際に2000~3000ディーナールで売ってしまうようなところであった。この島はかつてはポルトガルの王の占有下にあったが、イギリスの王の息子に与えられた娘の婚資として下賜された私有地の1つである。この島は荒れ果てている。本当に、とても荒れ果て、物価の高いところである。彼ら(イギリス人)の船団は、ヒンドゥスターンの周辺では他に場所がないためにこの島を居住地とし、彼らの一部は、先の理由からここを「抛り所」とみなしている。そこの出費は収入よりも多く、十分な徴税もないために、そこへの人の往来はほとんどない。[*Safīna*: 227-228]

同じ、イギリス東インド会社の管轄下にあるとはいえ、往路に滞在したマドラスの評価とは正反対である。

⁴⁵ イギリス東インド会社総裁のジョサイア・チャイルドの名を冠した Child's War として知られる対立。

⁴⁶ 1661年のイギリス国王チャールズ2世とポルトガル王女カタリーナとの婚姻に際して、持参金としてムンバイはイギリス側に贈られ、その後1668年にイギリス王室がイギリス東インド会社に貸し付けた。

以上、『スレイマーンの船』がたどった行路を見てきたが、イランからシャムまでの途上、彼らが様々な港町に立ち寄った点が明らかとなろう。寄港先には、「イギリス船」、「スーラト船」など、乗り込んだ船の船籍が影響している。彼らが帰路、往路と同様の航路をたどったりオランダ船を借り受けることができたならば、寄港先はまた異なっていたであろうが、異なる船籍で移動したことにより、期せずして彼らはインド洋の非常に広範な世界を旅することになった。それと同時に、著者の情報には、自らの体験や実際に目にした事象のみならず、イギリスやオランダの東インド会社関係者や船員、そして何よりもベンガル湾交易に通じ、シャムに長年滞在した在住イラン人たちからの情報が含まれることとなった。その結果、『スレイマーンの船』からは、同時代に主に自国の船で旅をしたヨーロッパ人の旅行者が記すインド洋海域とは異なる世界を垣間見ることができる。次章では、著者がどのような人びとに言及しているのか検討しよう。

3. インド洋の「多様な人びと」

アユッタヤーの多民族性については、古くはトメ・ピレスが「アラビア人、ベルシャ人、ベンガラ人、たくさんのケリン人、シナ人、その他の国の人がいる」と書き、1685年にアユッタヤーを訪れたショワジは、「43か国の人びとが、皆お国ぶりの衣装をまとい、お国ぶりの武器を持っていた」と伝えるなど、ヨーロッパ人の記述をもとに、これまでも広く知られてきたことである。あるいは、インド洋地域でのイラン・インド系の人びとの活動もまた、近年の研究でとみに言及されている⁴⁷。ここでは、17世紀末のインド洋を広く旅したひとりのシーア派ムスリムであるイラン人の記録から、アユッタヤー朝だけではなく、インド洋海域世界の「人びと」について見ていきたい。

『スレイマーンの船』全編を通じて、人びとの出身地としては実に多様な地名が挙がる。それと同時に、著者ムハンマド・ラビーウは、多くの紙数を「宗教」に充てており、彼の関心に、「宗教・宗派」があることが窺われる。よって、以下、ムハンマド・ラビーウによる「人」の分類を、出身地、および宗教・宗派に分けて検討する。なお『スレイマーンの船』には、地域名や国名として、「ペグー」、「日本(Japān)」なども挙がるが⁴⁸、「人」について触れていない場合は考察の対象とはしない。

1) 出身地

出身地では、「イラン」、「ルーム」、「アラブ」、「ヒンドウスターン」、「シャム」、「フランク」、「中国」といった大きなものから、マーザングラーン、ホラーサーン、アスタラーバード、「イラン出身のグルジア人」、「モグール」、「オランダのフランク人」などの表現が見られる。

A) アユッタヤー朝下の人びと

アユッタヤー朝下のシャムの人のことを、『スレイマーンの船』では主に「シャムの人びと (mardum-i

⁴⁷ アユッタヤーの多民族性については、ショワジ: 186、石井 1999: 86-89 を、またインド洋海域でのイラン人の活動については、Subrahmanyam 1992 を参照のこと。

⁴⁸ 「日本」を「ジャパーン (Japān)」という音写で呼んでいるのは、ペルシア語史料では初めて (かつおそらく唯一) のことである。

Siyām/jamā'at-i Siyāmī)」「シャム人 (Siyāmān)」と呼んでいる。彼らの自称が「ターイー (Thā'i)」族であることは説明されるが、「シャム」の呼称を使うのは、アユッタヤー朝下の「イラン人」や「フランク人」が彼らのことを「シャム」と呼んでいるのに倣ったものだと思われる [Saftna: 85]。『スレイマーンの船』において、この「シャム人」への言及が圧倒的に多いことは言うまでもないが、続いて「イランの人 (mardum-i Īrān/Īrānī)」の存在が際立つ。さらに、「フランク人 (Farangiyān)」、「ヒンドゥ (Hindū)」、「ヒンドの人 (Hindiyan)」が何度か見られ、「ジャワやマカッサルの人 (mardum-i Jāwī va Makāthar)」、「グルジア人 (Gurjī)」、「中国の人 (mardum-i Chīn)」という呼称もある⁴⁹。この他、この地方に独立して暮らす「ラーヴァンド (Lāvand)」と呼ばれる別の部族の名前も挙がるものの [Saftna: 155]、概して出身地別の言及は少ない。

一方、ヨーロッパ人の記録や地図に基づき、17世紀のアユッタヤーの町には、ポルトガル人、オランダ人、日本人、中国人、マレー人、コーチシナ人、モン人、マカッサル人らの居住区があったことが知られている。しかし、『スレイマーンの船』では、これらの人びとにはほとんど言及されず、「イラン人」や「インド人 (ヒンドの人)」以外には、1686年に反乱を起こしたマカッサル人や、ヨーロッパ人に対する呼称の「フランク人」が現れるのみである。「どの民であれ、この町 (アユッタヤー) にやってくると、それぞれに居住区や場所をつくって移住してしまい、自らの信仰や宗教を維持している」 [Saftna: 132] と述べる一方、どのような人びとが居住していたかについてはほとんど触れられない。この差はどこから来るのであろうか。ひとつには、シャム滞在中、イラン使節団がアユッタヤーには赴かず、1年を通じて主に離宮であるロップリーにあったことが挙げられる。加えて一行は、イラン人高官に世話されたために、外国人と接することがほとんどなかったのかもしれない⁵⁰。それゆえ、彼らが接した人びとは、宰相や医者といった宮廷の高官たちか、同胞のイラン人か、あるいは身の回りの世話をするシャム人に限られていたのであろう。

アユッタヤー朝下での著者の交友対象がほぼ同胞の「イラン人」すなわちペルシア語話者に限られていたと思われる中、数少ない出身地に、「モグール (Mughūl)」というのがある。この語が北インドのムガル朝、ひいてはその支配領域を示していることは言うまでもないが、他方おそらくこれがヨーロッパ語の諸文献において「Moor (もおる)」として知られる人びとではなかろうか⁵¹。ただし、「イラン人」

⁴⁹ 中国に関しては、「ヒターイ (Khitāy)」という旧来の地理概念も見られるものの、出身者に限ってみれば、「チーンの人」という表現のみで現れる。なお、『スレイマーンの船』の中では、「中国人」はもっぱら医者として登場する。たとえば、王子の教育係として、「中国、シャム、ヒンドの人びとからなる数人の医者」と、ギーラーン出身の1人の医者がいる [Saftna: 136] という表現など。

⁵⁰ 使節団は到着当初、邸に軟禁状態にあり、ナーラーイ王との謁見後もあまり出歩かなかったようである [Saftna: 71-72; タシャール: 406-409]。その背景には、王やフォールコンが使節団の来訪理由を疑っていたことや、アーガー・ムハンマド死後のイラン系集団の弱体化や親フランスへの政策転換があろう。

⁵¹ Moor は「ムーア」とも呼ばれ、モロッコなど北アフリカのムスリムを指す語であった。その後アラブやアフリカのムスリムを指す用語としてヨーロッパ諸言語で用いられたが、南アジアや東南アジアでのその用法については誰を指すのか曖昧な点が多い。江戸時代の日本でも莫臥爾などの当て字で「もおる」という語が伝わり、長崎にはペルシア語を話す「もおる通詞」が存在し [長島 1986]、さらには金糸や銀糸を用いた「もおる織り」が珍重された。しかしここでも、主にインド方面を指す「もおる」が「ムガル」の音から来ているのか、未だ明確な解は得られていない。

と「モグール」に関しては、著者の中でも使い分けが曖昧であり、同義のような場合もある。一方で、「イランの人びと」と「ヒンドウスターンの人びと」「ヒンドの人」と分けている箇所がある点にも留意したい。ここからは、著者、ひいてはシャムにいる「イラン人」にとっては、出身地による両者の違いがあったと考えられる。いずれにせよ「モール（もおる）」という語が、当時の「ヨーロッパ人」がイラン・インド系（場合によってはアラブも含む）のムスリムを一括りにした呼称であることに對し、当事者たちは「イラン」「インド」とより詳細な出身地域で互いを識別していたことが明らかとなる。

B) インド洋海域世界の中の「イラン人」

著者ムハンマド・ラビーウは、シャム王国の中では通過したほぼすべての場所で「イラン人」の存在を見出している⁵²。彼が名前を挙げるだけでも、ハーッジー・サリーム・マーザングラーニー、大宰相のアブドゥッラッザーク（ギーラーン出身）、アーガー・ムハンマド・アスタラーバーディーと、その息子のチャオ・チューとチャオ・キヤー、シュージュタル出身の後任宰相、メルギーの長官およびその息子ムハンマド・サーディク、ベップリーの長官サイイド・マーザングラーニー、ホラーサーン出身で「宰相職」兼「イラン人統括官職」にあるハーッジー・ホージャ・ハサン・アリーなどがいる。彼らの配下にいる数百人については、「イランの人びと（mardum-i Īrān）」もしくは「イラン人従者（mulāzīmān-i Īrānī）」と、必ず「イラン」という点を強調して総称している。もっとも、著者がシャムを訪れた1680年代後半には、これらの人物は初期移住者の2代目もしくは3代目であり、母親は現地の人間である場合が多かった。しかしそれにもかかわらず、著者は、これらの人びとを「イラン人」という範疇に入れているのである。

この他、ホラーサーン出身の詩人サイイド・ダルドマンディー（Sayyid Dardmandi）なる人物⁵³や、名前は挙がらないが、「ギーラーン出身の医者」、シャムとの交易を行っていた「イランの商人」、シャムに渡った「イラン出身の詩人」、大儲けを狙ったシーラーズ出身のサイイドの商人への言及がある。さらにはニコバル諸島のいずれかの島に渡り、悪徳商人として活躍するマーザングラーン出身のイラン人や、インドからセイロン島に移住したイラン人についても触れている⁵⁴。

これら「イラン人」の出自をもう少し詳しく見てみると、ホラーサーンからマーザングラーン、ギー

⁵² アユッタヤーのイラン人については、「もおる（Mores）」を含め、『スレイマーンの船』やフランス使節ら外国人の記録を利用した Aubin の研究が非常に詳しい [Aubin 1980]。ところで先行研究ではあまり触れられないが、彼らは自分たちの「故地」の生活習慣をシャムに持ち込んだことも重要である。『スレイマーンの船』の中では、ロップリーやアユッタヤーで使節団が滞在する場所は、「絨毯が敷かれ、風呂が備え付けられた邸」である。この二つの要素はいずれも「イラン様式」として認識されており、絨毯や風呂のないシャムの家屋とは明らかに異なる。また、ナーラーイ王が幼少から「イラン式」の食生活や衣服になじんでいたとされるが、水タバコや、食事の際にバラ水が出されたり、イランの伝統的な菓子（ファールーデ）が供されたりと、交易品とともに生活様式もまた、彼らが伝えていることが明らかとなる。

⁵³ Dardmand というのは、ペルシア語で「痛みをもつ」という意味なので、固有名詞ではなく「苦悩のサイイド」という意味で用いられている可能性もある。彼はフェルドウスイーの『王の書』を翻訳するようナーラーイ王に命じられるが、「火の審判」にかかる一件で王にやり込められたようである [Safina: 123]。

⁵⁴ 別表および Safina: 136, 138, 173, 184 等参照。

ランと、イラン北東部からカスピ海南岸にかけての出身者が大半である。例外的に、イラン南西部のシューシュタルや南方のシーラーズ出身者がいるものの、基本的にはシャムに渡った「イラン人」は、ホラーサーンからカスピ海南岸地方の出身者だったと考えられよう。アスタラーバード出身のアーガー・ムハンマド時代にインドから招いたイラン人の傭兵集団 200 人の出身地は、「とりわけアスタラーバードとマーザンダラーン」だと殊更に言われている [Safina: 98]。また、アーガー・ムハンマドの没後、Mullā Ḥasan 'Alī Shūshṭari に連なる「シューシュタル出身」のニスバを持つ人物が後任に据えられるが、それを妬んだホラーサーン系の人物が国王に直訴し、シューシュタリーのもとで働くことを拒絶する。このとき、「イランの人びと」はみなホラーサーン系の人物になびき、国王の委託交易から一斉に手を引いた [Safina: 101] とあることから、17 世紀後半のアユツヤ朝では、「イラン人」の中にもホラーサーン系やイラン南部系など種々の出身地があったにもかかわらず、ホラーサーン・カスピ海南岸系が最大派閥として地縁によって結合し、シャムからインドにかけてのベンガル湾交易を広く掌握していた点が浮かびあがってくる⁵⁵。

ところで、『スレイマーンの船』の中で異色なのが「イラン出身のグルジア人の若者」である。彼は馬に騎乗している最中に事故で亡くなるが、おそらくは傭兵として渡ってきたのであろう。推測の域を出ないが、祖先はサファヴィー朝のゴラームだったのかもしれない。このような人物がシャムにいたこともまた、イラン系の人びとのダイナミックな動きとともに興味深い点である。

また先述のように、ムスカットで船から落ちて死んだマーザンダラーン出身のメッカ巡礼者への言及があるが、この巡礼者の帰港先がおそらくはインド東岸のマドラスであった点は看過し得ない。使節団の乗ったイギリス船は、スーラトやムンバイなどに立ち寄った可能性もないわけではないが、この人物の場合、少なくともマドラス＝ムスカット＝メッカという行程を往復しようとしていたことが窺われる。西アジアと南アジアを結び、陸域と海域をつなぐこのような移動は、決して稀なケースではなかったのだろう。そしてここからも、マーザンダラーンやホラーサーン出身者によってインド洋に拡がるネットワークが構築されていた形跡が見られるのである。

一方、『スレイマーンの船』では、コチやムンバイといったインドの西海岸では在地のイラン人に関する記述が皆無である点にも注意したい。ムンバイの場合は、東海岸のマドラス同様、イギリスが建設した新しい港市であるためにムスリムが未だ少数なのかもしれないが、他方、コチのように過去には存在したムスリムが確認されない港町もある。さらに、ムスリムといえども、西海岸では主にシャーフィイー学派だと述べられている。このように、イラン出身者への言及がインドの西海岸ではなく、東海岸に偏

⁵⁵ 15 世紀初めから 18 世紀中ごろのイラン人(ペルシア人)の移住や拡散は 3 期に区分され、その第 1 期はインド洋西部の沿岸、紅海、東アフリカ、インド北西部のグジャラートへの拡散であり、第 2 期(16 世紀最後の四半世紀から)は南アジアへ、また 1650 年ごろから始まる第 3 期には、東南アジアの大陸部やインドネシア西部にまでイラン人の活動領域は広まったとされる。なかでも第 2 期に移住し南インドで最も成功を収めたのが、Mīr Muḥammad Sayyid Ardīstānī (1591-1663 年) というイスファハーンで生まれ育った人物である [Subrahmanyam 1992]。上で見たように、シャムにもイラン各地の出身者がいるものの、17 世紀後半にはホラーサーン・カスピ海系の出身者で占められるようになる。これはインド洋海域全体で見られることなのか、なぜホラーサーン出身者に収斂していくのかといった点については今後の課題としたい。

るのは、後背地であるデカン高原との関係があるのだろう。すなわち、デカンのシーア派政権であるゴールコンダ王国の領域支配やネットワークとの関係である。この点については今後さらに検討する必要があるが、『スレイマーンの船』の記述からは、イラン系の人びとの分布や展開は、インドの東海岸とベンガル湾を中心に行われていたことが跡づけられ、インドの西海岸や、立ち寄ることのできなかったグジャラート地方との関係性は十分には見えてこないのである。

C) 「フランク人」

「フランク (Frank)」と総称される「ヨーロッパ人」についても見ていこう。『スレイマーンの船』の著者は、イギリス (Inglis)、オランダ (Wulandis/Wuland)、ポルトガル (Purtughāliya) など、当時の「国」ごとに分類している。主に挙がるのはこの3つであるが、その上で、「イギリスのフランク人 (Farangī-yi Inglis)」、「ポルトガルのフランク人 (Farangīya-yi Purtughāliya/Farangān-i Purtughālī)」といった表記が見られる。「アングレ・テル (Āngle-terr)」や、「イギリスの民 (ṭā'ifa-yi Inglis)」という表現などからは⁵⁶、イギリスというひとつの国とその「国民」という意識が垣間見られよう。

しかし、このようにヨーロッパ人を国別に把握している一方で、『スレイマーンの船』では「フランス (Farānsa)」の語はまったく現れない。マカッサル人の反乱鎮圧に一役買ったのはフランス海軍であり、その話を非常に詳細に伝えつつも、ムハンマド・ラビーウは「フランク人たちの中の多くの民」[*Safina*: 134]と述べるにとどまる。また「最近では、さらに200人近くのフランク人を連れてきて従者とし、賃金を支払っている」[*Safina*: 154]と述べるが、ここでも実態はフランス兵士であるにもかかわらず、「フランス」という表現は見られない。「フランク」がそのまま「フランス」を指すとも考えられるが、『スレイマーンの船』では、イギリスやオランダの場合は「人」のみならず、会社や国家としても扱われるのに対し、当時シャムで最も勢いづいていたと思われるフランスについては、個別の言及がなされないのである。フォールコンへの敵意からか、船を借りたイギリス人や交渉したオランダ人とは異なり直接の接触がなかったためかはわからないが、ムハンマド・ラビーウは決して「フランス」という固有名詞を挙げないのである。

ただここで重要な点は、著者がイギリス船やスーラト船に乗り、実際にインド洋の様々な港市に停泊したからこそ、「オランダ人」「イギリス人」「ポルトガル人」の違いを理解したことであり、17世紀後半という時代になってようやく、ペルシア語史料の中に「フランク人」として一括されないヨーロッパ人の姿が確認されるのである。「アジア人」にとっての「ヨーロッパ人」認識が具体化しつつある一例としてこの点は強調しておきたい。

2) 宗派

宗教や宗派としては、「シーア派」、「シャーフィイー派」、「ハナフィー派」、「ハワーリジュ派」、「ヒンドゥ」、「キリスト教徒」、「不信心者」、「偶像崇拜者」といった語句が用いられており、比較的詳細に分類されている。ここではムスリム、キリスト教徒、偶像崇拜者と大きく3つに分けて見てみよう。

⁵⁶ *Safina*: 24, 108.

A) ムスリム

著者のムハンマド・ラビーウにとって、同じムスリムであっても宗派の相違は重要であった。

シャムのイラン人たちがシーア派だったことから、「シーア派」への言及は比較的多く見られる。「ルーム出身のチェレビー」はトルコ人であるものの、シャムに渡って「シーア派に改宗」したことから、彼はある種の親しみをこめて、この人物に言及している。フランス人宣教師が、「[バンコクの] 城の司令官はコンスタンチノープル生まれのイスラム教徒」[タシャル: 464]と述べるのに比して、イラン人でシーア派の著者からすると、オスマン朝下の「ルーム出身」でありながら「シーア派に改宗した」という事実がより重要視されている。

しかし一方で『スレイマーンの船』では、「スンナ派 (sunni)」という表現はまったく見られない。「スンナ派 (sunni)」という大きな括りではなく、シャーフィイー派やハナフィー派といった、いわゆる法学派で著者は判断している。その際、古くから指摘されていることではあるが、インド洋沿岸部はシャーフィイー派が多いという事実を、17世紀末のイラン人著者も改めて述べている。なかでもシャーフィイー派として挙がるのは、テナッセリムの一部の住民、パッタニー、アチェ、ジャワ、マカッサル、マラバール、ディーヴであり、すなわちマレー半島、スマトラ島からインド西岸にかけての海域である。これらはヨーロッパ側の史料では通常、シーア派を含めて「ムスリム」や「モール」と一括されてしまうところであるが⁵⁷、著者自らが「12 イマーム・シーア派」であることから、同じムスリムであっても「彼らはシャーフィイー派である」と区別して認識し、特記している点が大きく異なる。さらに、インド沿岸の一部では、ムスリム同胞に対しても海賊行為を行うシャーフィイー派や、イスラームを棄教する者たちなど、ムスリムにあるまじき人びとの存在も著者は目にしている。そのため、全体的に微妙な距離感でこれらのスンナ派ムスリムについては述べられている。

また、最初の寄港地で目にしたハワーリジュ派については、「ナーシィビーやハワーリジュ」、「アズラク派 (Azāriqa)」として言及がある。彼らのことを、「道を失った者」、「誤った道でイスラームを主張する」、「信仰心がない」と述べているが、これは、ハワーリジュ派がシーア派イマーム・アリーへの敵対者であることから来ており、著者の信条上の「偏狭さ」の表れであろう。もっとも著者にとって、同じムスリムとはいえ、ハナフィー派以外の人びとに会うのは初めての体験だったと思われる。シーア派政権のサファヴィー朝は、陸上の三方を、オスマン朝やシャイバーン朝などハナフィー派法学を擁するスンナ派政権に接していたことから、ハナフィー派法学派には相応の知識や馴染みもあったと思われるが、シャーフィイー派、さらにはハワーリジュ派というのは、書物や歴史の中でしか知らなかったのではなかろうか。ハワーリジュ派が歴史的にはこのように「信仰なき」者たちであるにもかかわらず、現地を訪れた著者が、彼らが商人たちに圧政を敷くことはない、とも述べている点は、思想信条に関係なく交易に従事する在地政権の様子が明らかになると同時に、著者の客観性も確認し得る。

全体的に、ムスリムの中で挙がる宗派は、シーア派、ハワーリジュ派、シャーフィイー派、ハナフィー

⁵⁷ たとえば東南アジアへのイスラームやキリスト教などの伝播について述べた Reid 1993: I/132-201 参照。ただし同書ではイスラームの中の宗派についてはまったく注意が払われておらず、「ムスリム」とのみ一括され、さらには東南アジアへのイスラームの展開過程においては、アラブ人やオスマン朝の活動に重点が置かれ、ペルシア語話者のイラン系やシーア派の人びとが果たした役割は、わずかに17世紀のシャム国内に限定されている。

派であり、これ以外の呼び名は見られない⁵⁸。

B) キリスト教徒

キリスト教徒 (naṣārā/tarsā) に対しては、旅の初めにマドラスで歓待され楽しいひと時を過ごしたことが影響しているのだろう、「太陽のごとき顔立ちのフランク人と月のごとき面差しのキリスト教徒」[*Safina*: 26]とさえ述べる。またマドラスで著者は、キリスト教徒の宗派の違いについても耳にしたようで、三位一体について簡単に説明し、キリスト教徒の中にもいくつかの宗派があることを伝えて、イギリス人とポルトガル人の信仰の違いについても述べている [*Safina*: 29-30]。もっとも、この段階では未だ、カトリックやプロテスタント、ルター派、ユグノーという名称による区別は出ていない。

一方で、アユッタヤー朝下のイラン人やサファヴィー朝使節団の「敵」であったフォールコンについて、著者ムハンマド・ラビーウは一度も彼の名前を挙げることはせず、常に「キリスト教徒の畜生 (ḥarāmzāda-yi naṣrānī)」や、「キリスト教徒の宰相 (vazīr-i naṣrānī)」、「ヨーロッパ人の宰相 (vazīr-i Farangī)」、「ヨーロッパ人の畜生 (ḥarāmzāda-yi Farangī)」、「あのキリスト教徒 (naṣrānī)」と蔑んだ呼び方をしている⁵⁹。「ヨーロッパ人でキリスト教徒の宰相」というものもある。フォールコンに対するムハンマド・ラビーウの評価には、当然シャム在住イラン人たちからの入れ知恵や吹聴があるが、「キリスト教徒である」ことと「ヨーロッパ人」であることは同義のように使われており、先のイギリス人の評価とは正反対の侮蔑や憎悪が含まれている。フランス勢力と組んで王をカトリックに改宗させようとしたフォールコンには、イスラームに改宗させようとしたイラン人たちに対して、「彼 (フォールコン) の本質からくる敵意と、信仰心からくる敵意 (‘adāvat-i dhātī va dīnī-yi ū)」の双方があるとムハンマド・ラビーウは指摘し、キリスト教徒であるフォールコンとは常に「不信心者とイスラームのあいだにある敵意」が存在するのだと述べる [*Safina*: 74, 102]。また彼らの滞在中にマカッサルの王子が反乱を企てるが、その話の中で、シャーフィイー派のムスリムである王子に、「おまえたち (ナーラーイ王ら) に対する信頼は何らない。なぜならおまえの大宰相はフランク人であり、我々と奴の間には本質的に信仰による敵意がある。とりわけ私とあいつとの間には」とさえ言わしめている [*Safina*: 133]。フォールコンに対しては、「信仰上の敵対者 (mukhālif-i madhhabī)」 [*Safina*: 67] だという表現も見られ、シャムという異教の地で、ともに外国人である少数派のふたつのグループのせめぎ合いが、個人的憎悪を越えて宗教の相違という問題に置き換えられてしまっている。

そうはいうものの、ムハンマド・ラビーウにとって、イギリス人のような信者もいるキリスト教は、以下に見る「不信心者 (kafara)」のきわみとも言うべき「偶像崇拜者」との乗り越えられない相違に比べると、はるかに許容し得るものだったかもしれない。

⁵⁸ Andaya 氏によると、「チューリア (Chulia)」と呼ばれる、南コロマンデルのタミル・ムスリムの商人がベンガル湾やマレー半島の交易で活躍していたとされるが、『スレイマーンの船』では、このような名称や「人」の区別は見られない [Andaya 1999: 133-134]。

⁵⁹ *Safina*: 55, 72, 74, 107, 109, 118 など。

C) 偶像崇拜者

『スレイマーンの船』において、仏教徒とヒンドゥ教徒など、「偶像崇拜者 (but-parast)」や多神教徒とされる人を区分するのは容易ではない。同書では偶像崇拜者という言葉の他に、「ブラフマン (Barahmani)」、「ブラフマンの子 (Barahman-zāda)」というバラモンを指す伝統的な表現や、「ヨギ」と呼ばれるヨーガ修行者 (濁騰)⁶⁰ の存在にも触れているものの [Safina: 26, 31]、インドに暮らす「ヒンドゥ (Hindū)」を、「インド人」あるいは「ヒンドゥ教徒」のいずれと捉えるべきなのか判別は困難である。ただし、シャムの宗教や南アジアの仏教の説明は詳細になされており、さらに、「ヒンドの人びと (Hunūd)」が最も良い民である。なぜなら彼らは動物を食べることや殺すことやいじめ傷つけることや圧制や暴虐をとにかく忌避し、いつも精神統一を行い、自らを律しているからである。一方シャムの人びとは最悪の民であり、最も真実から遠い人びとである」 [Safina: 111] と語っていることから、著者にとっての「偶像崇拜者たち」は地域によって種々様々だと認識していたことが窺われる。

著者によるシャムの「偶像崇拜者」への見解は別稿に譲り、ここでは簡単に触れるにとどめるが、シャムの習俗風習に触れる箇所では、頻繁に「この民とヒンドゥの人びとのあいだには明確な相違がある」と述べ⁶¹、シャムの宗教を説明する箇所では、シャムの人びとは「偶像崇拜者 (but-parast)」であり、「輪廻の信仰 (madhhab-i tanāsukh)」をもっており、そのみならず、太陽や月や動物までも「神」とみなし、さらには「永遠」や「創造主」を信じない「ダフリー (dahr)」であり、「いずれもがみな悪魔崇拜者 (shayṭān-parast) なのである」 [Safina: 109-113] と、著者は執拗なまでにシャムの信仰の「異常さ」を記している。

イラン使節団のシャム来訪の本来の目的は、先のショワジの記述などをもとに、シャム王のイスラームへの改宗だと言われることもあるが、実際にシャムの仏教社会を目撃したムハンマド・ラビーウにとって、「不信心」のきわみであり「悪魔崇拜者」とも言えるシャムの人びとを改宗させることは不可能だという諦めがその著書の端々から窺えるのである。

最後に宗教・宗派に関して、著者ムハンマド・ラビーウは、シャムにいる間、食事の後など、札拝を欠かさず行っている。またアリーの発言の引用もたびたび見られ⁶²、著者のシーア派信仰はゆるぎないのであったと考えられる。「彼」を見て「我」を振り返った時、信仰はさらに堅固なものになるということであろうか。サファヴィー朝期の「シーア派」の実態を探るのは史料的にも未だ困難な作業であるが、成立から2世紀近くを経た17世紀末においては、彼らのシーア派信条は確固たる地盤を築き、旅先においても堅持されるものであった。しかし別の見方をすると、イランのシーア派ムスリムは、使節団の一員として異国に赴くことにより、様々な宗教や人びとに出会い、そのことが逆に彼の信仰心やアイデンティティを強化したとも考えられよう。特に、それぞれの宗教の記載が詳細であることは、彼の「宗教」に対する関心の高さを示しており、人の交流が世界的に活発になる17世紀という時代において、イ

⁶⁰ 「ヨギ」については、明代の馬歡の書においても「コーチン (柯枝) 国」の条で「世捨て人」として現れる [小川編: 112-113]。

⁶¹ たとえば結婚について記した箇所など [Safina: 126]。

⁶² たとえばアリーの語録『雄弁術の道 (Nahj al-balāgha)』からの「使節」に関する引用など [Safina: 109]。

ラン、シャム、アラブ、イギリス、オランダといった「人」の分類が「国」もしくは「言語」によって細分化するのみならず、シーア派、シャーフィイー派、「ポルトガルのキリスト教」、「三位一体を信じる人」など、宗派においても細分化していることが明らかとなる。ひとりのイラン人がたどった航路は、多様性ととともに、様々な「要素」でもって個々人が識別される時代を、身をもって体験した軌跡なのである。

おわりに

17世紀の末に、インド洋を広く旅したムハンマド・ラビーウとその著書『スレイマーンの船』は、様々な人や宗教が闊歩していた当時の世界をまざまざと伝える。彼はイラン人であるがゆえに、インド洋世界やシャムの「イラン人」の個々の出身地に深く言及し、さらにはシーア派であるがゆえに、「ムスリム」の宗派についても細かく言及する。なかでも信仰上の「宗派」について、これだけ詳細に述べた同時期の史料は他には見られない。イスラームの宗派をここまで詳述した背景には、サファヴィー朝のシーア派信仰の確立やオスマン朝など隣国のスンナ派王朝との明確な区分があったことは想像に難くないが、もう一点この時代のインド洋海域世界の特徴があるように思われる。すなわち、「ヨーロッパ人」の進出である。イエズス会の宣教師に顕著に見られるように、17世紀のインド洋には、「イギリス」や「オランダ」、「フランス」の国や会社の随員として到来する者たちのみならず、また往々にしてそのような商人たちでさえも、カトリックやプロテスタントといった「宗派」を背負ってやってきた。彼らのこのような「宗派意識」が、それまでは思想信条に捉われない「アジアの海」においても波及的に影響し、「アジアの人びと」の間でも意識される時代となっていたことが窺われるのである。この点については、西アジアの陸域世界と合わせて今後さらに検討を重ねたい。

また、使節団がイギリス船で出港し、マドラスに立ち寄ったことも看過してはならない。彼らはここで初めてイギリスというひとつのヨーロッパ・キリスト教文化に接したのであり、立食や曲芸や女性とのダンスなど、それまで知らなかった世界を体験した。近世期にイラン人の書き残した旅行記は少なく、ヨーロッパに関する記述も非常に少ない中、『スレイマーンの船』はインド洋世界の中で「ヨーロッパ・キリスト教社会」を垣間見ることとなった。その結果、伝統的に「フランク人」と総称されてきたヨーロッパ人について、より具体的に「イギリス」「オランダ」といった固有名詞が付与されることになったのである⁶³。彼は、この使節団としての旅で「アジア」と「ヨーロッパ」のその両方の世界を見た人物と言っても過言ではなからう。

本稿で検討したように、西アジア陸域世界の者が見た、南・東南アジアの海域世界は、同じ「アジア」として一括りにできないほどの相違点や多様性あふれる社会であり、「アジア」とは何かを問い直す際の有効な指標を提示しているのである。

(付記) 本稿はトヨタ財団 2011 年度研究助成プログラム「ペルシア語旅行記に見るもうひとつの世界観——近世インド洋海域の宗教・交易ネットワーク」(代表：守川知子)にかかる研究成果の一部である。

⁶³ シャムに赴く前にマドラスでイギリス文化に触れたことが、その後の彼の、シャム社会への偏見に満ちた叙述に影響を与えている。同書を扱う際にはこの点も考慮すべきである。

地名	船名	滞在	頁
1 バンダ・レ・アップス	サファヴィー朝	6ヶ月	10
2 ムスカット	ハワーリ ジュ派の アラブ (ヤアーリ バ朝)	3泊 便所 一行は 下船せ ず	15-16
3 マドラス(チ ナパタン)	イギリス	3-4 週間	16
4 メルギー	アユッタ ヤー朝	数日	37
5 デナッセル ム	アユッタ ヤー朝	数週間	40

『スレイマーン船』の記述

(特記記述なし)

ここは「アリーの敵の」ナースィビー (nāsībī) とハワーリジュ派のアラブたちの港である。かつてはポルトガルのフランスク人 (Farangīya-yi Purtaughāyīya) の占有下にあったが、数年前、上述のハワーリジュの策略と謀略によって、思わしきフランスク人が教会で礼拝に勤しみ、武器や戦艦を手にしていないときに、「かれらを破すために、われが不信心者に対し悪戯たちを遇わしている」[Q19: 83] のとおり彼らに襲いかかり、半殺しにし、彼らを捕らえ、城壁や上述の港を占領したのであった。そのときから現在にいたるまで、上述のハワーリジュの占有下にある。【以下、住民のハワーリジュ派は、7世紀のアリーとの戦いの後、逃げた2人のハワーリジュの末裔だという話】

この港に代官を任命し、フランスク人たちへの恐れからこの港の維持と防衛に努めている。事実、堅固な港であり、周囲には山々があり、彼らの敵襲の船が襲撃されている。戦争や抗争時には、誰にも1ディーナールたりとも買納を支払わない。ヒンド [インド] の多くの果物がここで手に入る。この者たちの信仰心のなさにもかかわらず、商人や行き交う人々に対する圧制や不正は見られない。ムスリムたちからは10%徴収するところを、3%しか徴収しない。

たまたま、マーズンダラン出身の男が1人、聖なるアッラの館 (カアバ) への巡礼から帰るところであり、ムスカットでこの船に乗り込んだ。その晩、彼は船の縁で首に手をあて眠りかけていたが、風が強くなり、船が揺れていたために、彼の乗る船は海のように揺れ落ち、彼の意識の魚は虚無の海の中を泳いでいった (=縁から落ちて死んでしまった)。

47日後、目的のチナパタンの海岸に到着した。ここはカルナタカ (Karnāṭak) の王の港の1つであり、ハイダラーバード周囲部に近く、イギリス (Ingliš) が12000 フンの額で借り受けている。彼らはそこに城壁を造り、町を建設した。

ここは、非常に緑豊かな心地よい港である。約4分の1がアラブと、ポルトガルのフランスク人の一団がいる。かつて、この港の近くに「マイラープーール (Maylāpūr)」と呼ばれる別の港があり、上述のフランスク人たち [ポルトガル人] が占有していた。だが彼らが起こした不埒な行いのために、ハイダラーバードの支配者 (vālī) は軍を率い、彼らの城壁を打ち破ってしまった。残った者たちはここにやって来て住み着いた次第である。イギリスの長官 (hākīmī Ingliš) は、彼らから財や金銭を取り上げはせず、圧制や抑圧も行わず、港が発展することに喜びを見出している。日に日に周辺各地から [人々] がここを目指してやって来ては、住み着いている。

【イギリス国王王弟と新王即位の宴】「彼ら (イラン人使節たち) の状況に合った料理や飲み物を [我々イギリス人] は 存じ上げないので、もし [この招待] お断りなされるくらいであれば、[同行させている] 宮廷の料理人たちを連れてきて、注文に応じて料理をしてもらうようにしよう。我々もまた、[使節団の人びと] ご自身の膳を味わうことができよう。」

【別の驚異的な出来事】1人のブラフマン (Barahman) がやってきて、占いをしてやらうと言った。使節たちは嘲ってやらうと彼を呼び求め、占いをしてもらった。

イランの出身者による「ズルフィカール (二又の剣)」という名の建物 [があった]。その不運な男はその地方へ行つたところ、かの地の帝王が彼をその森林の長官 (hākīmī) にして監督者 (zābī) とした。また [別の] 建物や風品があり、それらはその国では不信心者の誰ひひとりとして生み出せないようなものである。(中略) 非常に手の込んだ素晴らしい建築物であり、使節のために絨毯が敷かれていた。その地方の人間は誰も、疑った [イラン式の] 料理を知らなかった。そこで、上述の者の息子のムハンマド・サーディクが接待係に任じられていた。

ここは、非常に緑あふれた城壁都市である。そこにはおよそ 5000 ~ 6000 軒の家があり、シャムの人々や、シャーフイーイ派やハナフイー派のヒンドゥスターン出身のムスリムたちがあり、さらにはヒンドゥ (Hindu) やフランク (Farangī) が暮らしている。その場所には山々の間に位置しており、絶え間なく続く豊饒な降雨と相当な湿度の上昇により、【詩句】「毎日、夜まで朝露のような気候である」。

彼 [イラン大使] が重篤な状態で到着したという報告が偉大な帝王に届くと、2人の医師 — 1人はシャムの者でもう1人は中国 (Chīn) 40

6	ジャラ グ?	1 泊	の者——が、彼の治察のために急ぎ派遣された。 (特に記述なし)	42
7	ベッブリー ヤー朝	1 泊	その地で長官 (hakim) をしており、権限を有していた (shih-ikhiyat) サイド・マザンダラーニー (Sayyid Mazandarāni) が出迎えに 急ぎやってくる、伺候の儀に必要な諸事を執り行った。	42-43
8	スーハーン (誤記?)	数日?	その近郊に到着すると、チェレビー (Chilībī) という名のルーム出身の男が「現れた。この男は」この地方へやってきてシエーア派 [に改宗す るという] 榮譽に浴し、現在はその地の住人でありラージャ (rāja) である。	43
9	アユッタ ヤー 「船の町」	?	【アユッタヤーまで1日行程の地】その後、イラン人の一団の中の数人が、1人は右百人隊長 (gūzbāshī) で、もう1人はイランの人々の側 から出された時季記録官であったが、その他の者たちと出迎えにやってくる。 この営所ではハージャ・ハサン・アリー (Khawja Hasan 'Alī) という名のホラーサーン出身の男が迎えに来た。この男は、前ホラーサー ン長官のハージャ・アブドゥッラチーフの姻戚だと主張しており、この当時、アーガー・ムハンマド・[アスタラーバーディー] に代わっ て「アユッタヤー朝の」宰相 (vazīr) であり、イラン [人] の集団の代表 (sarkardā) になっていた。	45
72			王はロップリーから「[船の] 町 (アユッタヤー)」に行き、数日後にわれわれを呼び出した。町には何時かの館があり、それらはきわめて 爽快で、暖かく、その地にあるどんな家よりも立派であった。すべてに絨毯が敷かれ、その内側には新しい風呂が設けられて いた。[ここを] われわれのために定め、シャムの多くの者たちやイラン人がサービスに任じられていた。	132
132			ジャワ (Java) やマカッサル (Makassar) の人びとの楽しみや踊りについて。彼らは別々の王国で、それぞれに帝王がいる。シャーフイー 派である。彼らの王国の一部はシャムの町に近く、向こうからやってきてこの地に住み着いた人びとは、自分たちの生活習慣を維持してい る。	136
136			【シャム王の日課】中国、シャム、ヒンド出身の何人かの医者とい人のギョーラン出身の医者がおり、ひとりずつ呼び出す。彼らは別々に王 の御前に行き、恭敬し祈願を述べた後、王の健康状態を調べる。	149
149			【シャム人は鹿皮などを】毎年オランダのフランク人たちが (Farangiyān-i Wulandīs) の会社に売り払う。彼らはそれらを日本 (Japan) や他の 場所を持っていき、かなりの利益を得ている。	153-154
153-154			【竜涎香について】結局、それについてはいろいろ述べられ、語られているものの実物を見たことがないのでその説明は保留するが、中国 (Chin) の地から来た1人の男——彼についてはしかるべき所で述べよう——は次のように伝えている。	165
165			【現国王は】サファヴィー朝宮廷や、ヒンドゥスターンの諸王国の支配者や他の帝王たちのものに何度か人を派遣し、自身との関係構築に努 めた。最近では、200人近くのフランク人からなる者たちを集め、従者として俸給を支払っている。	51
51			【船の町】にいたオランダ人のカピタン (Kapitān-i Wulandīs) から次のような話を聞いた。「私が中国に行ったとき、途中で激しい嵐のため にある島に漂流した。そこには人間の姿をしたものたちが暮らしていた。彼らの背丈は3腕尺で、みな裸で長いおさげ髪をしていた。(後略)」	52-53
52-53			その場所には庭園があり、破風殿が1つあった。それは、その近郊への使節たちの到着の知らせを聞いたのちに、1人のイラン人が王宮の 外側に建てたものであり、本人の信じるどころでは、「ホスロウの大アーチ」や「ハヴルナク宮殿」に匹敵させて造ったとのことである。	53
53			すぐそばの、この建物の隣にある2軒の建物は、我々たちのためにイランの建築様式で建てられたものであった。[それは]いくつもの部屋とホー ルが1つと、その脇にはハンマーム (風呂) (風呂) があり、建物全体に、絨毯、刺繍織り、ビロードの帳、金糸織り、中国やグジャラート仕立 の飾立が広げられ敷き詰められていた。百人隊長たちや王の宰相が連れ立って我々をそこに案内し、送り届けた。	65-67
65-67			この王の王権の始まりからこれより少し前まで、かの地の王国の諸事や重要事はすべてイランの人々の手にあり、偉大なる国王の権力の源 泉は彼らの統治権にあった。だが最近、宰相で王の相談役 (mushir) であったアーガー・ムハンマド・アスタラーバーディーが死去した。 その [滞在] 期間中、歌から人間にいたるまで少しばかり観察してみたところ、この帝王は、幼少時から現在までイランの人々とともに育	

			ち、彼らの食事や食べ物を味わって（味覚がなじんで）いるために、しばしば料理に手をかけ、実持手もなくこういった「イランの」食事を所望される。そのため、ヒンドゥスターン出身のムスリムの調理人を呼び寄せ、王のために調理するよう付き従わせている。	
			さて今日の場合は、諸事万端がイラン人の従者たちに任せられていた。われわれが運物の中に入ると、いつものように座椅子や刺繍やクッションが並べ置かれていた。[われわれが]着席すると、室中から金の細紐の水タバコが運ばれた。その下には金の盆があり、盆の上には水タバコの灰皿と燗いと火ばさみが置かれていた。[それは]イブラーヒーム・ベックのもとに運ばれ、さらにほかの者たちには銀でできた一式が「渡された」。香炉、バラ水散布器、練り薬入れ、そして数本のバラ水の瓶が宴席の真ん中にそろえられた。	66
			波け、発酵ショウガ、ブディング、温かい牛乳、ダイダイ柑、サトウキビ、フアーレド菓子があった。各人のもとには、すべて一揃いのものではなく、それらのうちの2、3個が置かれていた。50皿の食事の職つた大皿が、中国製の食器ととも運ばれた。中国製の食器はそれぞれ盆の真ん中に「置かれ」、銀のふたがさされていた。この地方や、ヒンドゥスターンの大半の地方の女候は恐いため、食事の職つた大皿は遠くに置かれ、取り分けられる決まりになっている。それゆえ、そのようにして「食事は」取り分けられた。	
			【食事が終わり】食布が片づけられると、イラン人の時事記録官は真の慈恵者たるお方を称え、真実の恩恵の主の「クルアーン」の平安なる開扉章を誦んだ後、自身の帝王（ナーラーイ王）の祈願を唱えた。その場では彼の宮廷の者のうち、宰相のハージャ・ハサン・アリーと、2人の百人隊長と、医者と、時事記録官と、書記と、数人のシャマムたちのはかは誰も座っていないかった。他のイラン人の従者は給仕の代わりに「別の」仕事に従事していた。その後、彼らはわれわれを家に送り届け、帰っていった。	
			イラン出身のグルジア人の若者で、その帝王（ナーラーイ王）の従者の列に列せられていた者が、乗馬や狩りの技術に十分に通じていないかわけでも、勇気がないわけでもなかったが、獲物をうしろから馬で追いかけていた際に、馬が転倒し、手に持っていた槍が地面に突き刺さり、彼の胸を突いてしまった。	68
			1098年のムハッラム月（1686/11/7）になり、この国王は当初から、イランの人々——彼らはアブ・アブドゥッラー・アル・ムニッサーインの袁悼行事に勤しんでいた——の援助をもってその地方の統治者の位に就いたために、毎年、モグル（Mughals）の人々が自身のやり方や信条で袁悼行事を行うことを認めていた。そしてご自身の館のそばに、故アガ・ムハンマドの明断により、偶像寺院を1つ壊し、モスクと広場（中庭）を造り、「絨毯、家具、飲み物、灯りとロウソク、必要なもの全般を一定の現金で、毎年陛下から彼らに与えられる」と定められた。	75
			今年是最初期のやり方で、この件についてお触れがなされ、「国王陛下は」ご尽力なされた。それゆえ、イランの人々は袁悼行事に勤しんだのであった。彼らはわれわれを毎日誘い、そのモスクへと連れていった。説教師はミンバル（説教壇）に昇り、偶像崇拜者や不信心者たちへの呪詛（la'n va ta'n）を大声で行った。ここ数年、「説教師は」彼ごと自ら象に乗り、見物に出かけていた。[だが]古くからの正しいやり方であり、揺らぐことのない原則としては、最初と最後に平安なる「開扉章」を「誦み」、真実なる恩恵の主の信仰と現世の導師が、預言者家の人々の敵の消滅と滅失を誦み上げ、その後、神の正しい道を求めるために「再度」開扉章を誦むのである。	
11	バクニ 国	バクニ王	「バクニ」は「船の町（アユッタヤ）」の一方に位置しており、「風の下（の国）」の1つである。実に心地よく快適で、豊かで繁栄したところである。その地方の大半の果物がこの地にある。胡椒、錫、沉香、白檀、蘇木が手に入る。砂金は、いわゆる鉱山があるわけではなく、その地の町や郊外で砂利のように毎年いくらか入手できる。その地の支配者（vali）は女であり、民（niaya）はムスリムで、シャーフイー派である。	216
12	マラッカ	オランダ	（特に記述なし）	217
			【アチエ】これは非常に大きな島である。かつてはジンのたちの居所であったが、今ではどんな片隅でも帝王や地主がいる。彼らは誰にも貢納しない。かつて、この地の王は、そこに行き、住み着いたアラブ人（Arab）であった。その死後も、このアラブ人の家系から数人の王が輩出された。彼らの子孫の1人が王になったとき、その王は非常に残酷で旺政を敷き、郷衆であり、彼の治世の間に多くの者が殺害された。彼の死後、宰相たちや高官たちはそれを好機とみて「相談し」、王の息子が小さく、娘が大きかったたので、娘を帝王とした。（中略）この地の帝王と人々はシャーフイー派である。	174-175
			【ニコバル諸島】この島の住民は貧しい。（中略）最近、マーザンダラーン出身の者が1人、この島に行き、住み着いた。	184

13	コチ	オランダ	8ヶ月	【セイロン島】この島には、他の「風の下の国」の帝王たちに比べるに強大な帝王がいる。ゆえに、王の兵士も臣下も家臣もみな臣民(nayyat)である。聞いたところによると、ここは島であるが、この王への「服従」のくびきがかげず、反抗する者たちがいるとのことである。この王は彼らを排斥するだけの力がない。古くからここ数年前まで、この島の港はポルトガルのアランク人たちの手にあった。この地から利益を上げ、ここに城砦や居住地を建設した。非常にすばらしく、堅固なものである。そうこうするうちに、オランダのアランク人の集団——有名であり、説明する必要もない——がこの地域一帯や他の国々のすべての港を占領するに至り、まずはこの島の王を自分たちのものとで懐柔し、砲撃や威嚇でもってかの城砦や港をポルトガルのアランク人たちから奪い、占有した。そしてその地の交易で利益を得、この島の商取引の収入すべてを自分たちだけのものとした。ここでは第一級のシナモンが手に入るが、オランダの会社以外には誰も買い買することはできない。
				ここ【アダムス・ピーク】やその周辺では宝石が手に入る。ヒンドゥーや、マハーデーヴァ派のヨーガ修行者たち(Jagyān)がそこにはいる。
				この島の交易はアランク人たちが行っているために、ヒンドの人のびと(Hindū)を除き、商人や旅行者はあまりそこへは行かない。ヒンドゥースタンのアミールたちによって「派遣された」2〜3人のイラン人が交易のためにその島【セイロン島】の方へ行つたところ、かの地の王は彼らを大切に丁寧に扱い、家や家具を与え、世話をしている。だが、彼らは外に出ることを禁じられている。
	コチ	オランダ	8ヶ月	【マニラ】最近、1人のアラブ人がかの地よりやってきて、数羽の色とりどりの鳥を携え、ヒンドゥースターンに持っていきこうとしていた。
				やがてオランダの支配下にあるマリバー【マラバール】の王国のコチの港に到着し、投錨した。(中略)この地のラージャはヒンドゥーであるが、いかなる権威や豪勢さも持ち合わせていない。
				【ムハンマドの時代、彼の預言者たる時(月が割れる話)を聞き、ラージャと家族は出かけていく。】ラージャはそれのお方(ムハンマド)への偶像【という名譽で】高められ、イスラームの来賓に浴した。(中略)だが、彼ら自身がこのような出来事を語り、伝えているにもかかわらず、ほどなくして彼らは背教し、自身の信仰へと戻り、偶像崇拜を選んではしまったのである。彼らは今にいたるまで、誤りと迷妄の道の中に取り残されている。彼らの言によると、「そのお方が存命の間、私たちはその信仰(イスラーム)を保持していた。だがその後は、その信仰にはさまざまな遠いが生じた。我々の信仰にはいかなる欠損もなかった上に、先んじてもいたのである。それゆえ、私たちは祖先の信仰へと戻ったのだ」と。[現在では]彼らのうちの誰一人としてイスラームに決して会おうとしないほどに、彼らはイスラームを選び、慎重になっている。
	コチ	オランダ	8ヶ月	ある日、散歩がてらにラージャの屋敷の門に通りがかったところ、そこには縦横100腕尺ほどの池があり、水を満面にたたえていた。たま
				たま小生の配下の1人がそこで手を洗おうとする。そうするが、かき洗ううちに、番兵たちは「そのことに」気づき、大声や叫び声をあげた。喧嘩や騒ぎを起こそうと、大勢の者たちが集まってきた。状況が明らかになった後、その地の者たちの一団がやって来て、「これは、ラー
				ジャやヒンドゥーが毎日2回やって来て、その中で体を洗う池である。彼らはイスラームと邂逅することを不浄(nails)と信じている」と説明した。詫びて、何度も願ひ入れた後、そのゴラームの咎は赦され、「池を空にして、よく濯ぎよ。そして新しい水を入れよ」というラージャの命が下った。聞いたところでは、もしその地方のイスラームがこのようなことをしたならば、その者は捕らえられ、たくさん痛めつけられるとのことである。
	コチ	オランダ	8ヶ月	【マラバール】その王国から3日行ったところに、[別の]部族があり、生まれながらのマリバー【マラバール】で、それぞれにラージャが見
				がいて、彼らはイスラーム教徒だと主張し、シャーフィー派で、かの地の大半の住人は「クルアーン」を暗唱する。(中略)彼らは船を見つけたとやってきて、戦闘を始め、命ある限り、船を奪おうと努める。彼らはこのような行為の正当性を表明する文書として、シャーフィ
				イーの証者(khuddām)たちが、「海で漁撈し、また獲物を食べることはあなたに許されている」[Q6:96]という章句の解釈において、「海での漁撈」を「船を奪うこと」だとし、そのようなやり方で、「人々の船を奪うことができ、この点については人[を強奪すること]も合法である」という解釈と法判断(fatwā)を行っているのである。彼らの論拠は、「もし不信心者の財産であれば、イスラームにとっては合法である」というもので、もしイスラームのものであれば、「信者たちは兄弟である」[Q49:10]に基づき、「当然のことながら、兄弟のものは互いのものであり、[互いの]分け前である」ということになる。そして船に乗っている者は、イスラーム以外にどのような人々であれ殺し、[相手が]イスラームであった場合でさえも、合法性を主張した後、彼らの身のくみを剥ぎ、自力でどこかにたどり着けるだけの糧食を与えて解

				放するのである。	
14	スーラト	ムガル朝	(沖ま で)	【ディープ】その地方の近くに、「ディープ (Drw)」の島がある。そこは帝王がいて、シャーフイー派のムスリムたちがいる場所である。そこでは竜涎香が採れる。彼らは言う。「かの地の王は、竜涎香から玉座を作り、その玉座の上に乗っている。その向かいには別の玉座があり、自身は座し、『クルアーン』をその竜涎香の玉座の上部に置いている。そしてその場所が公正さと正義を实践しているのだ」と。	222
15	ムンバイ	イギリス	3ヶ月 半	【入港できず】 われわれには船がなかったので、その半島 (ムンバイ) で3ヶ月間滞在した。[そこは] 水も空気もきわめて悪く、汚く、物価が高く、その地の住民は自分の子どもを飢饉の際に2000~3000ディナーナールで売ってしまうようなところであった。この島はかつてはポルトガルの王の占有下にあつたが、イギリスの王の息子に与えられた娘の婚嫁として下賜された私有地の1つである。この島は荒れ果てている。本当に、とても荒れ果て、物価の高いところである。彼ら (イギリス人) の船団は、ヒンドゥースターンの周辺では他に場所がないために、この島を居住地とし、彼らの一部は、「拠り所」とみなしている。その出費は収入よりも多く、十分な徴税もないために、そこへの人の往来はほとんどない。	225- 226 227- 228

【参考文献】

Muhammad Rabi' b. Muhammad Ibrāhīm. *Safīna-yi Sulaymānī*, Ed. by A. Farūqī, Tehran, 1977/78.

(*The Ship of Sulaimān*, Trans. by John O'Kane, London: Routledge, 1972.)

ショワジ、タシャーレ (鈴木康司、二宮フサ訳) 『シヤム旅行記』岩波書店、1991 年。

ファン・フリート (生田滋他訳) 『シアム王国記』『大航海時代叢書 オランダ東インド会社と東南アジア』岩波書店、1988 年。

小川博編『中国人の南方見聞録——瀛涯勝覧』吉川弘文館、1998 年。

Andaya, Leonard Y. "Ayutthaya and the Persian and Indian Muslim Connection." *From Japan to Arabia: Ayutthaya's Maritime Relations with Asia*. Ed. by Kennon Breazeale. Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Text books Project, 1999, pp. 119-136.

Aubin, Jean. "Les Persans au Siam sous le règne de Narai (1656-1688)." *Mare Luso-Indicum: L'Océan Indien, les pays riverains et les relations internationales XVIe - XVIIIe siècles*, 4, 1980, pp. 95-126.

Chularatana, Julispong. "The Shi'ite Muslims in Thailand from Ayutthaya Period to the Present." *MANUSYA: Journal of Humanities*, 16, 2008, pp. 37-58.

Chutintaranond, Sunait. "Mergui and Tenasserim as Leading Port Cities in the Context of Autonomous History." *From Japan to Arabia: Ayutthaya's Maritime Relations with Asia*. Ed. by Kennon Breazeale. Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Text books Project, 1999, pp. 104-118.

Hourdequin, Peter. "Muslim Influences in Seventeenth Century Ayutthaya: A Review Essay." *Explorations*, 7/2, 2007, pp. 37-46.

Marcinkowski, M. Ismail. *From Isfahan to Ayutthaya*. Singapore: Pustaka Nasional Pte LTD, 2005.

—. "Persian Religious and Cultural Influences in Siam/Thailand and Maritime Southeast Asia in Historical Perspective: A Plea for a Concerted Interdisciplinary Approach." *Journal of the Siam Society*, 88/1-2, 2000, pp. 186-194.

—. "The Iranian-Siamese Connection: An Iranian Community in the Thai Kingdom of Ayutthaya." *Iranian Studies*, 35/1-3, 2002, pp. 23-46.

Pombejra, Dhiravat na. "Crown Trade and Court Politics in Ayutthaya During the Reign of King Narai (1656-88)." *The Southeast Asian Prot and Polity: Rise and Demise*. Ed by J. Kathirithamby-Wells and John Villiers. Singapore University Press, 1990, pp. 127-142.

Reid, Anthony. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. Yale University Press, 2 vols. 1993.

Rota, Giorgio. "Diplomatic Relations between the Safavids and Siam in the 17th Century." *Aspects of the Maritime Silk Road: From the Persian Gulf to the East China Sea*. Ed. by Ralph Kauz. Wiesbaden: Harrassowitz, 2010, pp. 71-85.

Shaeik Ahmad, Omar Farouk. "Muslims in the Kingdom of Ayutthaya." *Malaysian Journal of History, Politics and Strategic Studies*, 10, 1980, pp. 206-214.

Smithies, Michael. "Seventeenth Century Siam: Its Extent and Urban Centres According to Dutch and

- French Observers.” *Journal of the Siam Society*, 83/1-2, 1995, pp. 62-78.
- Subrahmanyam, Sanjay. “Iranians Abroad: Intra-Asian Elite Migration and Early Modern State Formation.” *The Journal of Asian Studies*, 51/2, 1992, pp. 340-363.
- Wyatt, David K. *Studies in Thai History*, Chiang Mai: Silkworm Books, 1994.
- 石井米雄『タイ近世史研究序説』岩波書店、1999年。
- 。「後期アユタヤ」『東南アジア史3 東南アジア近世の成立』岩波書店、2001年、179-203頁。
- 羽田正『東インド会社とアジアの海』（興亡の世界史15）講談社、2007年。
- 守川知子「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド——16世紀イランにおけるシーア派都市の変容」『史林』80/2、1997年、1-41頁。
- 長島弘「『訳詞長短話』のモウル語について——近世日本におけるインド認識の一側面」『長崎県立国際経済大学論集』19/4、1986年、133-168頁。
- 。「スーラトアユタヤー長崎：ジョージ・ホワイトのシャム貿易報告書（1679年）の紹介を中心として」『調査と研究（長崎県立大学）』25-1、1994年、211-224頁。
- 。「インド洋とインド商人」『岩波講座世界歴史14 イスラーム・環インド洋世界16-18世紀』岩波書店、2000年、141-165頁。
- 。「タイのアユタヤ朝におけるイラン系ムスリム高官の活躍（17世紀後半）」歴史学研究会編『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ 18世紀まで』岩波書店、2009年、375-377頁。
- 和田郁子「要塞、市壁、「石の商館」——インド・コロマンデル海岸の港町：1606-1707年」『史林』95/1、2012年、110-139頁。